

揚櫨木遺跡 第11次調査

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

埼玉県狭山市遺跡調査会

うつぎいせき
揚櫨木遺跡 第11次調査

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

埼玉県狭山市遺跡調査会

序

狭山市域の遺跡は、中央を貫流する入間川の左右両岸に川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上でたいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発行為によって形としては滅失してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録・保存を行っています。

本報告書は平成11年度に実施した店舗建設に伴って行われた調査の成果報告書です。奈良・平安時代の住居遺構が発見され、隣接する同時代の遺跡群とともに、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が、今後の当地域の研究の一助となり、併せて市民の皆様の埋蔵文化財に対する理解を深め、生涯学習に資するものになれば幸いです。

結びになりましたが、発掘調査においてご理解いただいた中里 武氏と長根富美子氏、また、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成25年9月

狭山市遺跡調査会
会長 松本 晴夫

例 言

- 1 本書は狭山市大字上奥富地内所在の揚榿木遺跡第 11 次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は店舗建築に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は原因者が負担した。
- 3 発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。
平成 11 年 6 月 30 日付 教文第 2-49 号 駐車場建設
- 4 発掘調査期間及び整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。
発掘調査：平成 11 年 6 月 23 日～平成 11 年 9 月 13 日
整理・報告書作成：平成 18 年 3 月 1 日～平成 25 年 7 月 12 日
- 5 発掘調査は石塚和則が担当した。また、伊倉榮男、今井綾子、久保正雄、小林はつみ、斉藤通子、坂入しげ子、坂入 誠、瀬戸山真由美、高森志都、田口文枝、坂東昭子、堀内義一、増田早苗、山川淑恵、山本とし子が参加した。
- 6 図版の作成と出土品の整理は安井智幸が担当した。また、石塚 香、岸千代子、工藤匡史、瀬戸山真由美、名雲教子、橋本弓子、晝間由実子、古川恵子の補助を受けた。
- 7 本書の執筆は、第Ⅱ章を三ツ木康介が行い、その他を安井が行った。
- 8 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
赤熊浩一 大屋道則 中平 薫 田中弘明 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 三芳町歴史民俗資料館

凡 例

- 1 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。
遺構図：1/60、調査区全測図：1/400、遺物実測図：1/3
- 2 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
- 3 遺構の表記記号は以下のとおりである。
住居跡：SJ、掘立柱建物跡：SB、土壌：SK
- 4 遺物観察表の表記は口径、底径、内底径、器高はcmを単位とし、() 内の数値は推定値・現存値である。色調は部分省略し、青灰・灰白・褐灰・褐・明褐、他とした。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・やや良好・普通・やや不良・不良の 5 段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5% 単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
- 5 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	1
3 発掘調査の経過	2

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境	3
2 歴史的環境	6
3 遺跡の概要	8

III 遺構と遺物

1 調査成果の概要	9
2 検出遺構と出土遺物	10
住居跡	10
掘立柱建物跡	26
土壌	28

IV 結語

1 遺物	32
2 遺構	33
3 遺跡	33

挿図目次

第 1 図	狭山市遺跡分布図	4	第 10 図	第 96 号住居跡・第 56 号土壇・ 出土遺物 (1)	21
第 2 図	揚櫨木遺跡第 11 次調査区位置図	8	第 11 図	第 96 号住居跡出土遺物 (2)	22
第 3 図	揚櫨木遺跡第 11 次調査区全測図	9	第 12 図	第 97 号住居跡・出土遺物	23
第 4 図	第 40 号住居跡・出土遺物	11	第 13 図	第 98 号住居跡・出土遺物	25
第 5 図	第 92 号住居跡・出土遺物 (1)	12	第 14 図	第 14 号掘立柱建物跡・出土遺物	27
第 6 図	第 92 号住居跡出土遺物 (2)	13	第 15 図	第 15 号掘立柱建物跡	28
第 7 図	第 93 号住居跡・出土遺物	15	第 16 図	土壇 (1)	30
第 8 図	第 94 号住居跡・出土遺物	17	第 17 図	土壇 (2)・出土遺物	31
第 9 図	第 95 号住居跡・出土遺物	19	第 18 図	土師甕底部の比較	32

写真図版目次

図版 1	西調査区全景	図版 18	第 40 号住居跡出土遺物
図版 2	東調査区全景		第 92 号住居跡出土遺物 (1)
図版 3	第 40 号住居跡・出土状況	図版 19	第 92 号住居跡出土遺物 (2)
図版 4	第 92 号住居跡・出土状況	図版 20	第 92 号住居跡出土遺物 (3)
図版 5	第 92 号住居跡カマド・出土状況		第 93 号住居跡出土遺物 (1)
図版 6	第 93 号住居跡・北カマド	図版 21	第 93 号住居跡出土遺物 (2)
図版 7	第 93 号住居跡西カマド・出土状況		第 94 号住居跡出土遺物 (1)
図版 8	第 94 号住居跡・カマド	図版 22	第 94 号住居跡出土遺物 (2)
図版 9	第 95 号住居跡・出土状況	図版 23	第 94 号住居跡出土遺物 (3)
図版 10	第 95 号住居跡カマド・袖部分拡大	図版 24	第 95 号住居跡出土遺物 (1)
図版 11	第 96 号住居跡・カマド・第 56 号土壇	図版 25	第 95 号住居跡出土遺物 (2)
図版 12	第 97 号住居跡・カマド		第 96 号住居跡出土遺物
図版 13	第 98 号住居跡・カマド		第 97 号住居跡出土遺物 (1)
図版 14	第 14 号掘立柱建物跡	図版 26	第 97 号住居跡出土遺物 (2)
図版 15	第 15 号掘立柱建物跡		第 98 号住居跡出土遺物 (1)
図版 16	第 45 ~ 53 号土壇	図版 27	第 98 号住居跡出土遺物 (2)
図版 17	第 55 号土壇・調査風景		第 14 号掘立柱建物跡出土遺物

	理事	佐藤芳子	(狭山市文化財保護審議会委員)
	理事	栗原秀明	(狭山市教育委員会生涯学習部長)
(事務局)	事務局長	北田奈緒美	(社会教育課長)
	事務局	半貫芳男	(社会教育課主査)
	事務局	石塚和則	(社会教育課主査)
	事務局	北山誠也	(社会教育課主任)
	事務局	安井智幸	(社会教育課主任)
	整理担当	安井智幸	(社会教育課主任)

3 発掘調査の経過

発掘調査は工事予定区域の内、遺構が確認された 1,540㎡を対象とし、重機による対象地の掘削・残土移動後に遺構範囲確認を行った。個々の遺構の範囲特定後、覆土を人力で掘削し、併せて遺物の採取を行った。掘削の際に断面を確認するためのベルトを主軸方向とそれに垂直に交わる方向に設定して残し、これを基に断面図を作成した。断面図作成後にベルトは除去し、調査区内を清掃して遺構個別写真及び全景写真を撮影した。最後に遺構平面図の実測を行って対象地での調査を終了し、重機による埋め戻しを行った。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

狭山市は、市域中央を貫流する入間川によって分断された入間台地と武蔵野台地の境に立地する。

入間川は外秩父山地を水源とする名栗川と、青梅市に水源を持つ成木川が加治丘陵で合流して形成された河川で、比企丘陵入間台地を開析する都幾川・槻川・高麗川・越辺川・小畦川を束ねて荒川に接続し、市域から始まり荒川接続点周辺にいたる地域までの巨大な沖積平野を形成する。

沖積平野に繋がる市域の最も低い沖積面の両側には河岸段丘が見られる。段丘の内最も低い面は立川面、最も高い面は下末吉面であり、その中間に武蔵野面が存在する。

市域の最高点は、稲荷山公園南方の航空自衛隊基地内にあり、海拔高は約 100m である。高度は北東に行くに従って下がり、青柳北方の川越市と隣接する地点で最も低くなり、海拔高は約 29m になる。

市域の地下構造は、下末吉・武蔵野・立川のそれぞれの名を冠した礫層の上にさらに各名のローム層が乗る形になっている。下末吉・武蔵野ローム層は立川ローム層によって覆われているため、通常は露出していない。崖地でのみ観察できる。

下末吉ローム層は、下末吉面から武蔵野面へ遷移する場所でのみ観察される。主に鶯ノ木周辺の崖地で観察することが可能である。黄褐色から橙茶色の色調で、粘土化の進んだ柔らかいロームである。厚さは 3～4m で、輝石と角閃石および木曾御岳火山から噴出した Pm-1 が含まれる層である（ただし Pm-1 は、市域では未確認）。

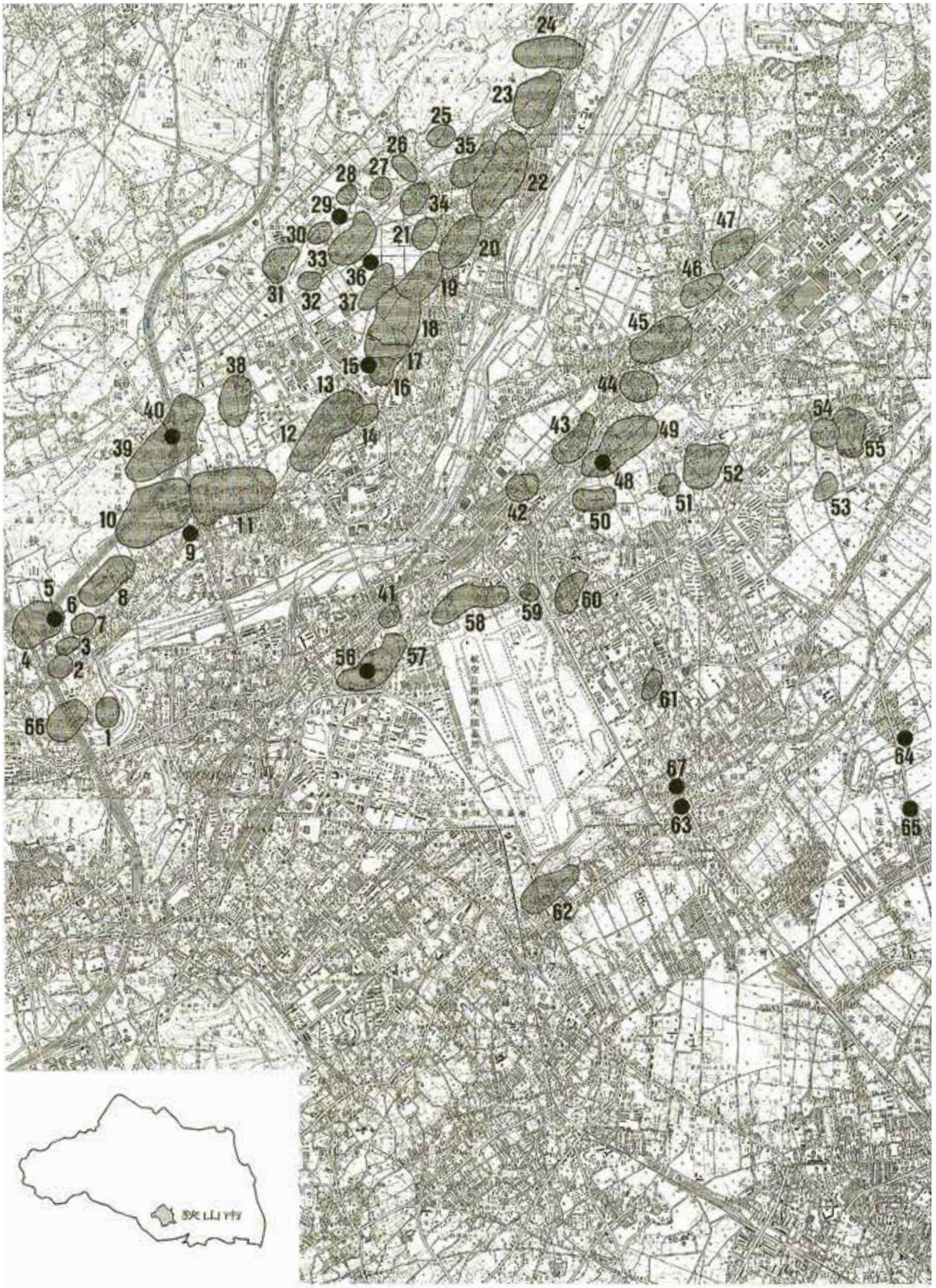
武蔵野ローム層は、下末吉面または武蔵野面から立川面に遷移する場所でのみ観察される。乾燥し易く暗茶褐色を呈し、最下部より 10～20cm 位に箱根火山から噴出した火山灰層である東京軽石層が存在する。輝石を多く含み、層上部に行くに従ってカンラン石が増える。

立川ローム層は市域全体を 1～2m 程度覆う層で、乾燥すると暗赤褐色～暗黄褐色を呈する。カンラン石・輝石を含むこの層の上部に遺構が存在するため、市域の発掘調査における遺構確認面の大多数は立川ローム層に設定されている。

市域の北側となる左岸は武蔵野・立川面の二段、南側となる右岸は、これに下末吉面を加えた三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の市内遺跡は市域の河川の中でも入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は、武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬古墳群、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連綿と帯状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向がある。

入間川右岸は、武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稲荷上遺跡、揚櫃木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、湧水地点の周辺に、集中的に集落が形成される傾向がある。



第1図 狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- 1 東八木窯跡群（22049）奈・平
- 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平
- 3 八木北遺跡（22021）奈・平
- 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平
- 5 沢口上古墳群（22020）古（後）
- 6 笹井古墳群（22019）古（後）
- 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平
- 8 宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平
- 9 金井遺跡（22071）中
- 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中
- 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平
- 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平
- 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平
- 14 上広瀬古墳群（22001）古（後）
- 15 森ノ上西遺跡（22079）先
- 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
- 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
- 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
- 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中
- 20 御所の内遺跡（22012）奈・平
- 21 英遺跡（22074）奈・平、中
- 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中
- 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平
- 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平
- 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
- 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
- 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
- 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
- 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
- 30 半貫山遺跡（22061）中
- 31 稲荷山遺跡（22058）縄（後）
- 32 前山遺跡（22059）縄（中）
- 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
- 34 町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中
- 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
- 36 下双木遺跡（22078）縄（草）
- 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平
- 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
- 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平
- 40 東久保遺跡（22070）先
- 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
- 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平
- 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平
- 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平
- 45 揚櫃木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平**
- 46 坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平
- 47 稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平
- 48 上中原遺跡（22025）先
- 49 中原遺跡（22025）縄（早～後）、奈・平
- 50 沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平
- 51 沢久保遺跡（22041）縄（中）
- 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平
- 53 吉原遺跡（22067）縄（前）
- 54 下向遺跡（22085）縄（前～後）
- 55 台遺跡（22084）縄（前～後）
- 56 稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
- 57 稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
- 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
- 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平
- 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平
- 61 富士見南遺跡（22081）縄（中）
- 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平
- 63 七曲井（22046）中
- 64 堀兼之井（22047）中
- 65 八軒家の井（22076）中
- 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
- 67 堀難井遺跡（22089）中

2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っており、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている（城近他 1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡、字尻遺跡（24）、右岸では揚楯木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されるにとどまり、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が看取できる。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市・飯能市・日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように当該期のみ限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている（渡辺 1998）。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構・遺物の確認例は非常に少なく、森ノ上遺跡で土壙中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が一点報告されているのみである（安井 2005）。

古墳時代の遺跡は、沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在までに調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性もある。当該期の集落遺跡には滝祇園遺跡があり、鬼高期に近い時代の土師甕や坏が出土している（小淵他 1983）。

奈良・平安時代の集落は、入間川左岸に帯状に23遺跡あり、右岸は久保・不老川流域のものを含めて14遺跡存在し、住居跡や掘立柱建物跡等の遺構群が検出されている。これら遺構群は、出土遺物を基に時代推定が行われ、8世紀初頭から10世紀末までの間、1世紀を四半期に分割した大略12期に分類して報告されている。市域の集落は、高麗郡が建郡された霊亀二年（716年）よりやや時代の下った8世紀中頃から形成され、その後9世紀第2四半期ごろにピークを迎えた後、次第に数を減らしていく傾向にある。

8世紀第1・2四半期に、入間川両岸にある宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19）、揚楯木遺跡が形成され始めているが、他期に比べて検出されている遺構・遺物数が少ないため不明な点が多い。指標になっているのは須恵坏で、特に底部の調整技法が観察できる物の内、回転糸切離し後に丁寧に底部前面～体部下位がヘラで調整された、底径と口径の差があまり無く、器高が低いものが当該期に分類

されている。他期の須恵坏に比べて口径が大きいものが多く、宮地遺跡第 16 号住居跡及び宮ノ越遺跡第 31・32・56 号住居跡出土遺物が主な指標になる。また、それより僅かに時代が下る宮地遺跡第 32 号住居跡出土遺物も底径の減少という新要素と並行する点から遷移期の指標としている。なお、これに後続する宮ノ越第 29・58 号住居跡出土遺物を酒井清治氏は国分寺創建事業が終わる時期に充てている。

若干時代が下る 8 世紀後半に分類される遺構は、基準とする須恵器の編年がやや不明瞭なために分類されている遺構・遺物の数量が少ないが、当該期に含まれるものが前後に分類されている可能性も否定できない。指標にしているのは小谷 B1 号窯（比企郡鳩山町）出土遺物で、口径・底径共に前期より縮小し、底部の周辺回転ヘラ削り・手持ち周辺ヘラ削りが主体となる。これに後続するのは將軍沢 2-B-2・C-3 号窯（比企郡鳩山町）製品だが、市内遺跡における南比企産の個体数が少ないため、直接これに繋げてはいない。

9 世紀前半の指標になっているのは、森ノ上第 11・18 号住居跡出土遺物で、須恵坏底部の調整が全面ではなく周辺部のみ施されている。器高は前期よりやや高くなり、口径・底径は縮小する傾向にある。縮小傾向は口径より底径においてより顕著に見られるため、底径と口径の差が大きくなる。当該期の遺構は入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡に見られる。

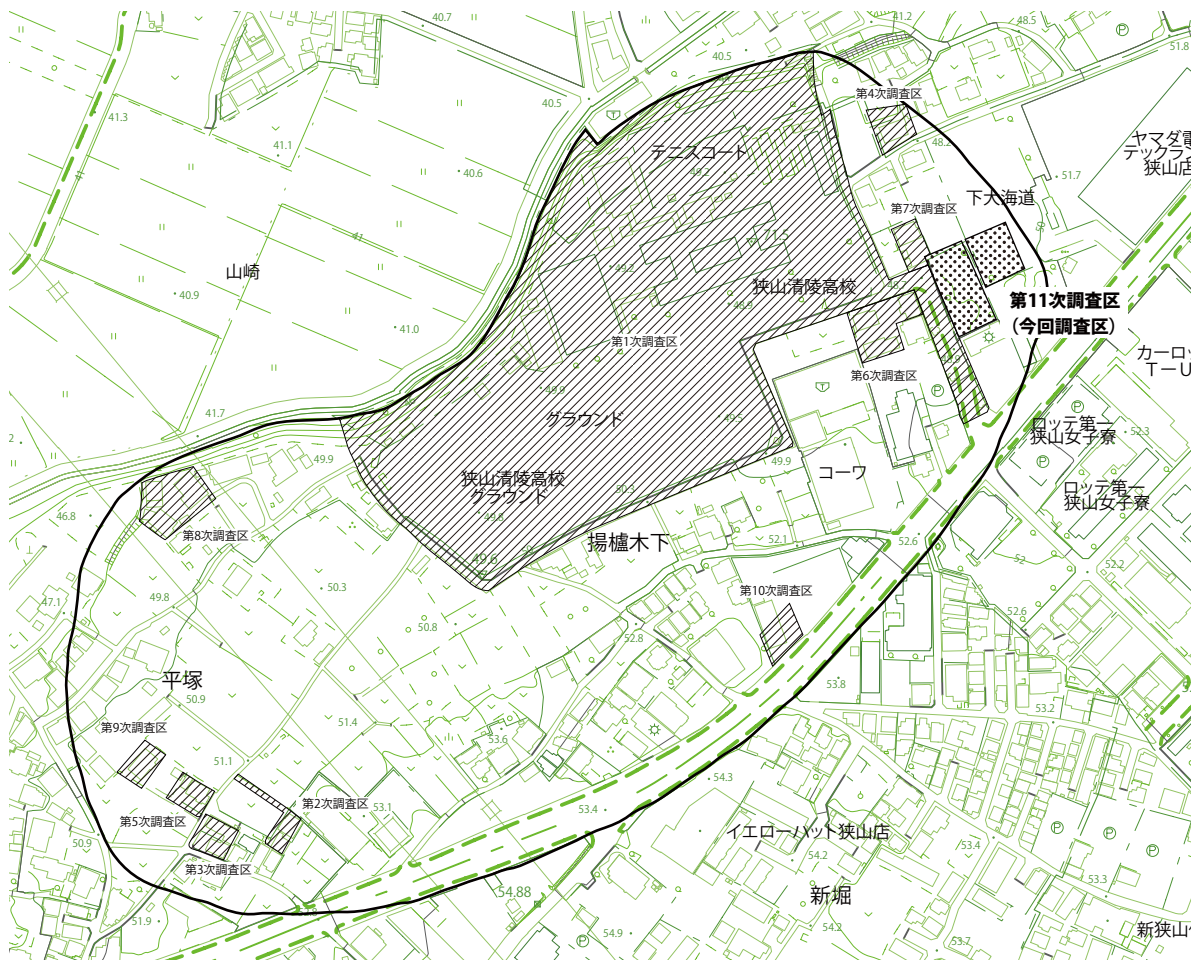
9 世紀中頃に、入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、今宿遺跡、金井上遺跡（10）、宮地遺跡へと連綿と集落が形成され、右岸でも稲荷上遺跡（47）、揚櫓木遺跡、峰遺跡（43）、戸張遺跡（44）、中原遺跡（49）、滝祇園遺跡へと、やはり帯状に集落が形成されている。この頃に見られる人口の増加とそれに伴う東金子窯跡群製品の普及は、承和 12 年（845 年）に開始された国分寺の再建に連動していると考えられ、当該期の市域の集落は、これに関係する人々のものである可能性が指摘されている。

9 世紀後半になると住居数は減少するが、入間川兩岸の遺構密度の低下が見られる一方、集落形成範囲の縮小はほとんど見られない。当該期の遺構は宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚櫓木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡に見られ、新久 A-1・2 窯から D-1・3 窯（入間市）の東金子系須恵器が出土する。約半数は還元焰による焼成が行われていない土師質須恵器の坏や埴が出現し始め、還元焰によって須恵器を焼成するための諸環境が悪化し、9 世紀中ごろまで続いていた生産技術大系の変容が看取できる。

3 遺跡の概要

揚榎木遺跡は、狭山市上奥富に所在する縄文時代前・中期および奈良・平安時代の集落遺跡で、入間川右岸の台地縁辺部に立地する。遺跡内の標高はおよそ 50 m で、遺跡北側の沖積地との比高差は 8 m を測る。遺跡面は北方向がやや低くなり、半円形の窪地になっている。西武新宿線狭山市駅より北東へ直線距離にして 2.0 km 付近に位置し、狭山清陵高校敷地内南側を中心に遺構が分布する。北東には坂上遺跡、南東には戸張遺跡、南には峰遺跡がある。

これまでに 10 回本発掘調査が実施され、縄文時代住居跡 11 軒、奈良・平安時代住居跡 80 軒、掘立柱建物跡 13 棟、土壇墓 3 基、土壇 44 基、溝 3 条が検出されている。遺物は黒浜～関山期までの縄文土器と、奈良・平安時代の南比企産・東金子産の須恵器、北武蔵型と呼ばれる甕を中心とした土師器の他、鎌や刀子、釘等の鉄製品が多数出土している。これらに混じって、灰釉・緑釉陶器も出土し、第 1 次調査では和同開珎が出土したため、埼玉県内では珍しいとして一時期高く評価された経緯を持つものの、官衛的な要素は殆ど確認されず、現在では所謂「一般的な大規模集落」との評価が多く見られる。また、交通路研究の観点からは、東の上遺跡（所沢市）と霞ヶ関遺跡（川越市）を結ぶライン上に位置し、東山道中入間川渡河点に関わる可能性を持つ遺跡として、対岸の城ノ越遺跡とともに注目されることがある。

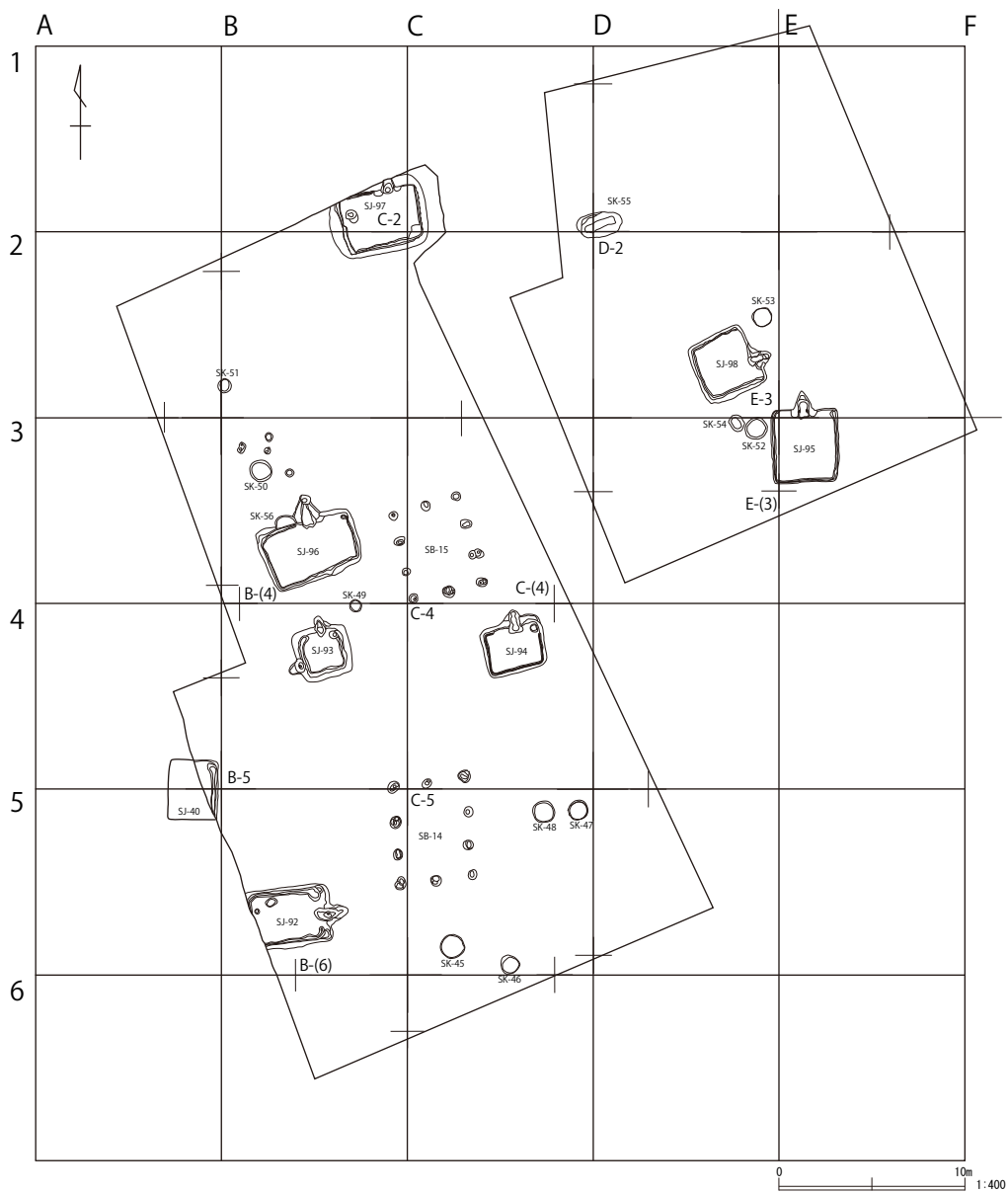


第 2 図 揚榎木遺跡第 11 次調査区 位置図

Ⅲ 遺構と遺物

1 調査成果の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡 8 軒、掘立柱建物 2 棟、土壇 12 基である。また、検出された遺物は、須恵坏・高台付坏・皿・埴・甕、土師甕・台付甕で、いずれも 9 世紀第 3～4 四半期のものと推定される。掲載したもの以外にも東金子産（底部回転糸切未調整）の須恵坏片が多数出土したが、図化出来るほどの破片ではなかった。



第 3 図 揚楯木遺跡第 11 次調査区 全測図

2 検出遺構と出土遺物

住居跡

第40号住居跡（第4図）

調査区南東端に位置する。第1次調査で第40号住居跡として全体の2/3が調査済みで、本調査では残りの約1/3を調査した。第1次調査時においては重複住居跡として検出しているが、今回の調査では重複の痕跡は確認できなかった。また、カマドは両調査で確認できなかった。平面形は東西軸が長い長方形を呈し、全体の規模は、東西3.19m、南北3.15m、深さは0.32～0.68mである。主軸方位はN-0°-Eを指す。

床面は全体的に平坦かつ硬質で、残存状態は良好である。覆土は7層に分けられ、第1層の耕作土が深い位置まで入りこんでいる。

壁溝は今回の調査では東側部分でのみ検出されている。第1次調査の結果と照らし合わせると、北壁東部を除いて全体を巡る浅い壁溝があったものと推測される。

検出された遺物は須恵器、土師器で、その中の実測可能なもの3点を掲載した。1から3は須恵坏である。1は東金子産のもので、全体的にロクロ目が顕著かつ厚手である。器形は底部から直線的に立ち上がり、体部中位のやや上でやや湾曲する。また、体部下位には指差し入れ痕が確認できる。2も東金子のもので、厚手に作られている。気泡混入によるひび割れが多く見られる。器形は底部から湾曲して立ち上がり、全体的に丸みを帯びている。外底部にヘラ記号「×」が確認できる。3も東金子産須恵坏の底部および体部欠片で、外底部に墨書「膝」が書かれている。

第40号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	11.9	6.4	5.5	3.7	80%	白色粒、小礫	普通	暗灰色	底部無調整。口縁部に整形痕が看取できる。	東金子
2	須恵坏	12.2	6.2	6.6	3.8	100%	白色粒、小礫	良好	青灰色	底部無調整、底部外面にヘラ記号「×」有。	東金子
3	須恵坏	—	8.0	7.4	—	20%	白色粒、小礫	普通	明灰色	底部無調整、墨書「膝」有。	東金子

第92号住居跡（第5・6図）

調査区南東端に位置する。本調査では全体の約9割を調査した。残りの部分は調査区外となる。

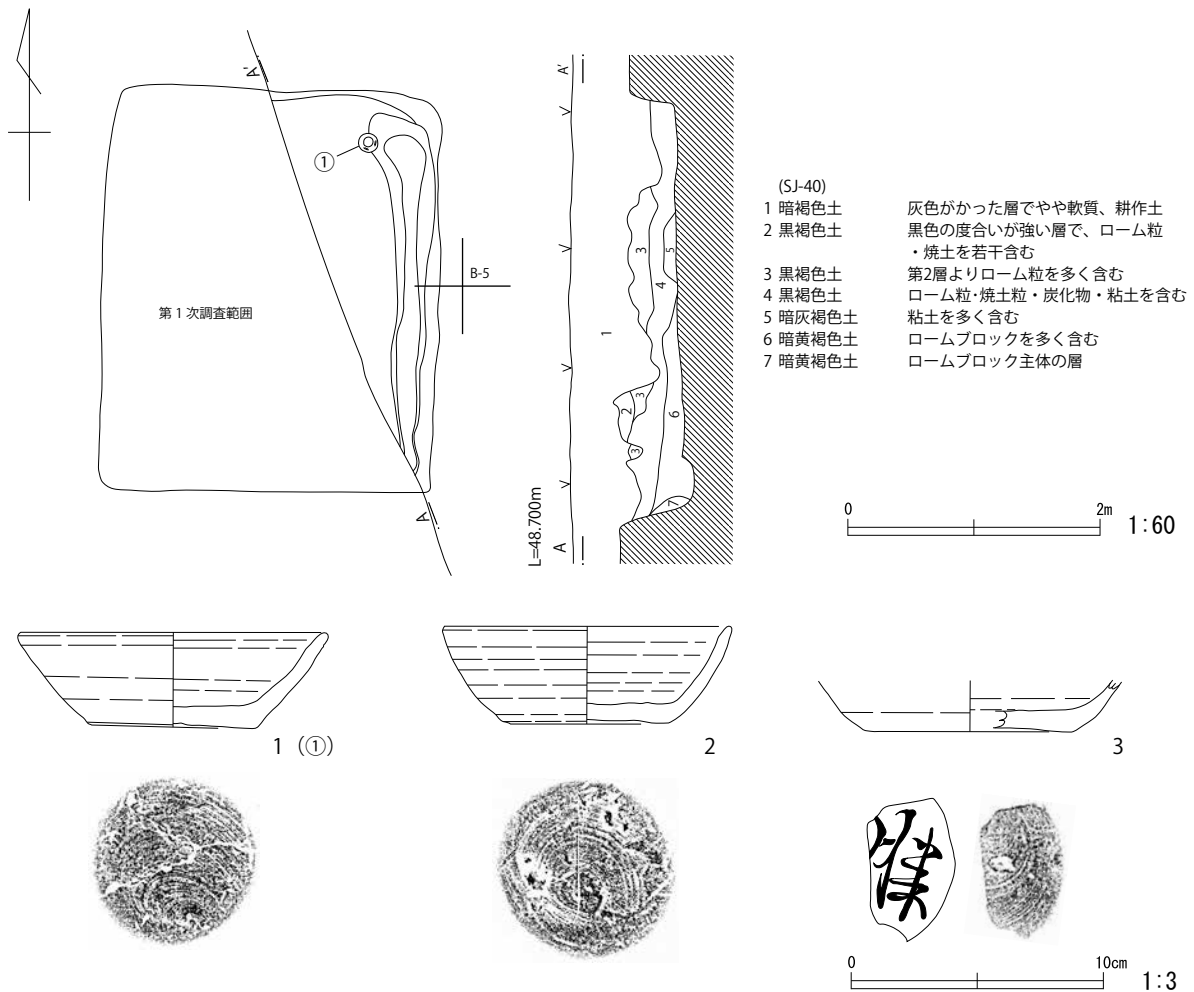
平面形は正方形を呈し、全体の規模は東西4.41m、南北3.22m、深さ0.80～0.99mを測る。主軸方位はN-86°-Eを指す。

カマドは東カマドで残存状態は良好であるが、両袖および支柱石は確認できなかった。平面形はほぼ楕円形で、長軸長1.53m、短軸長1.00m、深さは0.60mである。

床面は全体的に平坦かつ硬質で、残存状態は良好である。覆土は11層を確認した。

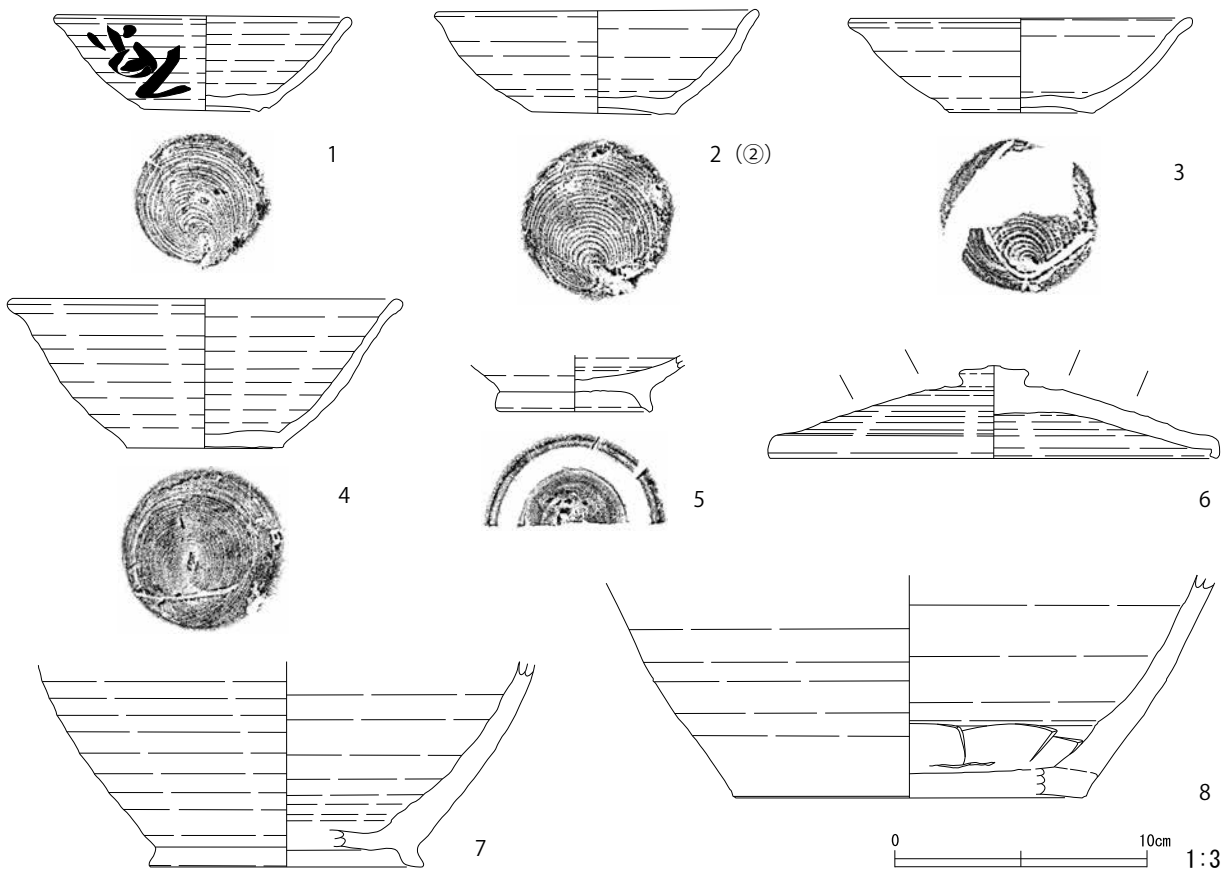
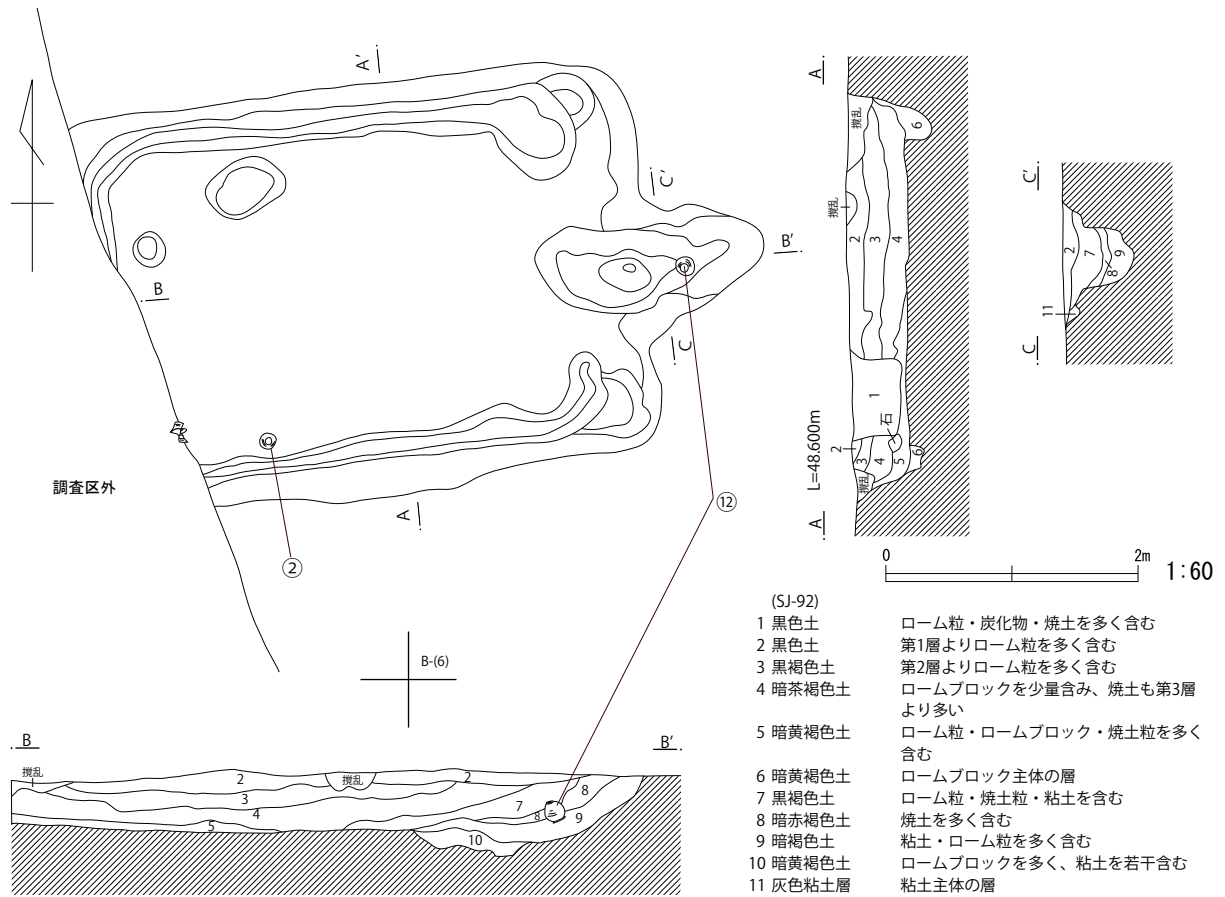
壁溝はカマドのある東壁を除いて全周し、東壁両端に貯蔵穴らしきものが確認できた。

検出された遺物は須恵器、土師器、瓦、銅製帯金具で、その中で実測可能なもの16点を掲載した。1は東金子産の須恵坏で、全体的にロクロ目が顕著で器厚は均一である。器形は全体的にやや丸みを帯びている。また、体部下位には指差し入れ痕が確認できる。体部には墨書で「原」と記されている。2も東金子産の須恵坏で、器厚が均一かつ全体的に丸みを帯びた形に作られている。調整は雑で、内面には引き上



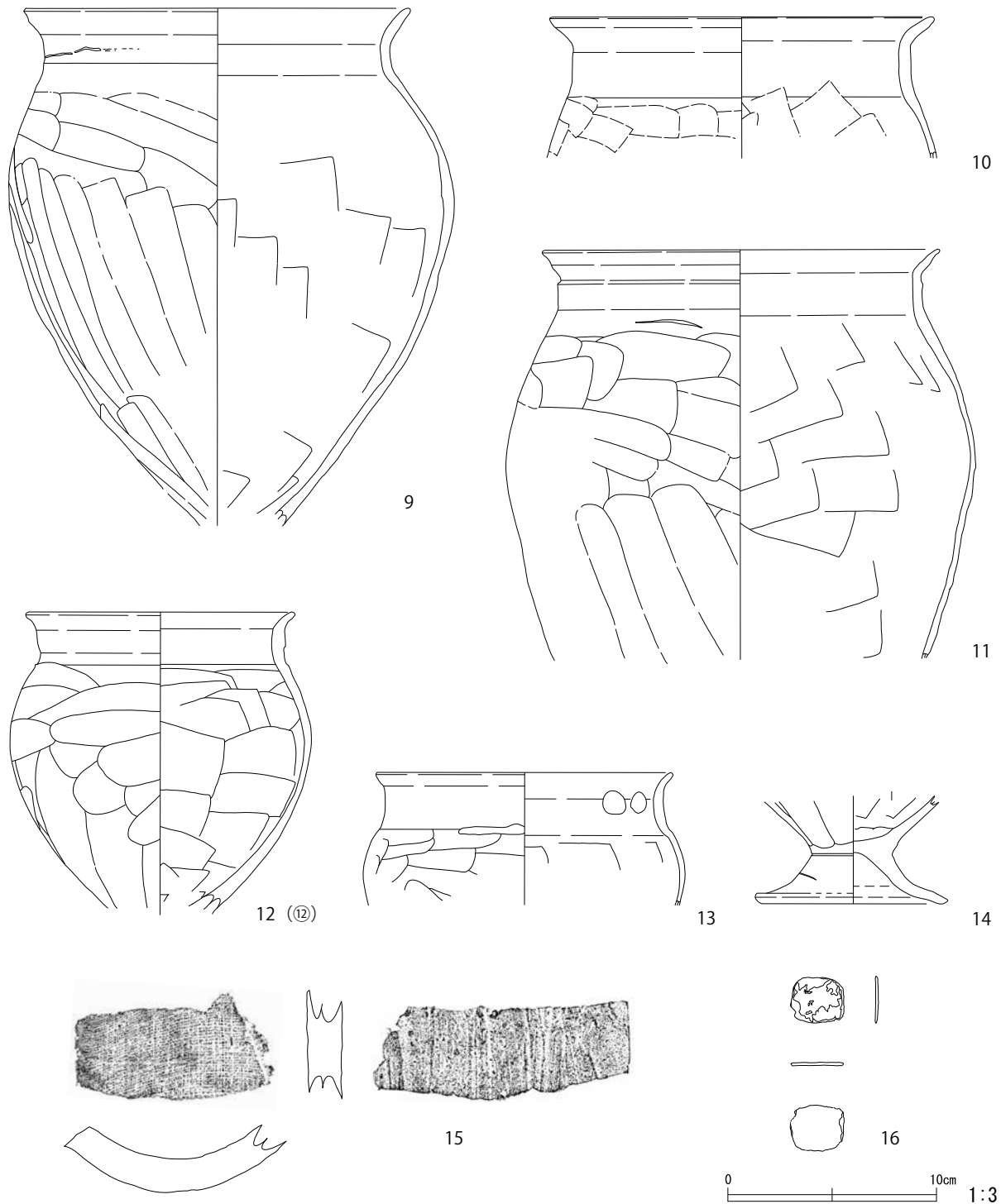
第4図 第40号住居跡・出土遺物

げ痕が確認できる。また、口唇部内側には重ね焼痕が見られる。3も東金子産の須恵坏で、全体的に丸みを帯びた作りだが、口縁部は外反している。器厚は均一である。4は東金子産の、深身の須恵坏である。体部中位で弱く湾曲する。口縁部は厚手に作られて外面をみると若干外反しているように見える。5は東金子産台付須恵皿の高台部分である。外周が接地し、中心に近い方が浮く形に仕上げられている。6は東金子産の須恵蓋である。全体的に厚手に作られているが、口縁カエリ部分のみが他に比べると薄い。ボタン状鈕がついている。7は東金子産台付須恵碗の底部から体部中位までの破片である。底部と体部の接合部がかなり厚く作られている。内面に降灰を受け、ガラス質の物質が付着している。8は東金子産須恵甕の底部から体部下位の破片である。底部と体部の接合痕が顕著で、内面の接合部付近はヘラ削りが施されている。外面の一部にはたたき痕が確認できる。9は土師甕である。口縁部断面は「コ」字状で、最大径が体部中位にある。体部上位の横削りを入れた後、中位・下位の順で縦に削っている。10は土師甕口縁部の破片である。口縁部断面は「コ」字状を呈している。11は土師甕の口縁部から体部中位までのものである。口縁部断面は「コ」字状をしており、口縁部のナデによる段差が顕著に見られる。最大径は体部中位になる。12は土師台付甕の口縁部から体部下位までのものである。口縁部は「コ」字状をしており、最大径は体部中位にある。台部分のみ欠損しており、その他はほぼ完形である。13は土師台付甕の口縁部から体部上位の破片である。口縁部は「コ」字状をしており、最大径は中位よりやや上になると推測さ



第5図 第92号住居跡・出土遺物(1)

れる。口縁部内側には整形時に持ち上げた際についたと考えられる指圧痕が見られ、口縁部内側と体部外面に被熱によるこげ痕が見られる。14は土師台付甕の台および体部下位の破片である。台の断面は「八」字状を呈する。15は東金子産丸瓦の破片である。外面は縦ヘラナデ整形、内面は布目痕が確認できる。16は帯金具である。銅製のもので表面が盛り上がるように反っている。腐食が進んでいて、ほぼ形を残さない。



第6図 第92号住居跡 出土遺物(2)

第 92 号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	11.3	4.9	4.8	3.8	85%	白色粒、石英、長石、小礫	良好	灰色	底部無調整、体部外面に墨書「原」有（逆位）。	東金子
2	須恵坏	12.3	5.5	5.4	4.0	100%	白色粒、石英、長石、小礫	良好	灰色	底部無調整。	東金子
3	須恵坏	13.4	5.8	4.8	3.7	70%	白・黒色粒、小礫	不良	暗黄褐色	底部無調整。	東金子
4	須恵埴	15.0	6.1	5.8	6.0	50%	白・赤色粒、石英、長石、小礫	良好	黄褐色	底部無調整。	東金子
5	須恵高台付皿	—	5.0	—	—	20%	白色粒、小礫	良好	灰色	底部無調整。貼付高台。	東金子
6	須恵蓋	17.5	—	—	3.6	50%	白色粒、石英、長石、小礫	良好	明灰色	貼付ツマミ。ツマミ貼付前にヘラ調整。	東金子
7	須恵甕	—	10.6	—	—	20%	石英、小礫	良好	灰色	貼付高台。底部内面に降灰後のガラス質が付着。	東金子
8	須恵甕	—	—	—	—	20%	白色粒、長石	良好	暗灰色	底部に接合痕が看取できる。	東金子
9	土師甕	23.2	—	—	24.3	60%	白・黒・赤色粒	普通	明赤褐色	口縁部「コ」字下部開く。全体的に歪んでいる。	在地
10	土師甕	17.8	—	—	—	10%	白色粒、石英、小礫	良好	赤褐色	口縁部「コ」字下部開く。	在地
11	土師甕	18.6	—	—	—	40%	石英、長石	普通	暗赤褐色	口縁部「コ」字下部開く。	在地
12	土師台付甕	12.4	—	—	—	90%	白・赤色粒、長石	良好	暗赤褐色	口縁部「コ」字下部若干開く。	在地
13	土師台付甕	13.8	—	—	—	10%	白・赤色粒	良好	暗赤褐色	口縁部「コ」字下部開く。指圧痕有。	在地
14	土師台付甕	—	8.4	—	—	10%	黒色粒、石英	良好	明赤褐色	台端部が一部分で反る	在地
15	丸瓦	—	—	—	—	5%	石英、長石	良好	灰色	内面布目、外面ヘラ削り痕有。	東金子
16	帯金具	2.5	2.2	—	0.1	95%	銅製	—	—	鉸具か鉈尾の部分か。	—

第 93 号住居跡（第 7 図）

調査区中央東側に位置する。平面形は一辺およそ 3.00 m の正方形を呈している。深さは 0.50 ～ 0.71 m を測る。

カマドが北と西にそれぞれ存在し、北カマドの主軸方位は N-12° -W で、西カマドの主軸方位は N-79° -E を指す。

床面の残存状態は良好で、住居本体および北カマドの覆土は合わせて 13 層、西カマドの覆土は単独で 5 層に分けることができた。

壁溝は北壁以外の全体を巡る浅い壁溝があり、西カマドは後付のものと考えられる。

検出された遺物は須恵器、土師器で、その中で実測可能なもの 12 点を掲載した。1 は東金子産の須恵坏で、全体的に均一な厚さでつくられており、底部から湾曲して立ち上がり、口縁部で緩く S 字状に外反

第 93 号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	(10.8)	(5.2)	4.2	3.5	30%	白・黒・赤色粒	普通	明灰色	底部無調整。	東金子
2	須恵坏	12.3	—	—	—	20%	白・赤色粒、長石、小礫	良好	暗灰色	底部無調整。	東金子
3	須恵坏	13.7	5.6	5.6	3.8	40%	白色針状、白色粒、小礫	不良	明灰色	底部無調整。	南比企
4	須恵坏	13.3	5.6	4.7	3.5	40%	白色粒、長石、小礫	普通	灰色	底部無調整。口縁部に整形痕が看取できる。	東金子
5	須恵坏	13.8	7.6	6.8	3.2	10%	白・黒色粒、小礫	普通	灰色	底部無調整。	東金子
6	須恵坏	11.5	4.8	5.1	3.9	40%	白色粒、小礫	普通	赤褐色	底部無調整。薄手に作った底部を貼付け再調整している。	東金子
7	須恵埴	13.4	5.6	5.7	5.3	60%	白・黒色粒、金雲母	不良	明茶褐色	底部無調整。表面多孔。	東金子
8	須恵高台付坏	15.8	6.9	6.2	7.5	50%	黒色粒、チャート	不良	黄褐色	底部無調整。貼付高台。貼り付け後の調整が甘い。	東金子
9	須恵高台付皿	13.6	7.2	6.8	2.7	60%	白色粒、長石	良好	暗灰褐色	底部無調整。貼付高台。貼り付け後の調整は丁寧。	東金子
10	須恵埴	—	6.7	5.8	—	40%	白色粒、小礫	良好	暗灰褐色	底部無調整。瓶の底の可能性も否定できない。	東金子
11	土師台付甕	11.4	—	—	—	80%	黒色粒、長石	普通	暗茶褐色	口縁部「く」字。内面に煤が付着。	在地
12	土師台付甕	11.8	—	—	—	10%	白・赤色粒、小礫	良好	暗茶褐色	口縁部「コ」字。	在地

(風倒木)

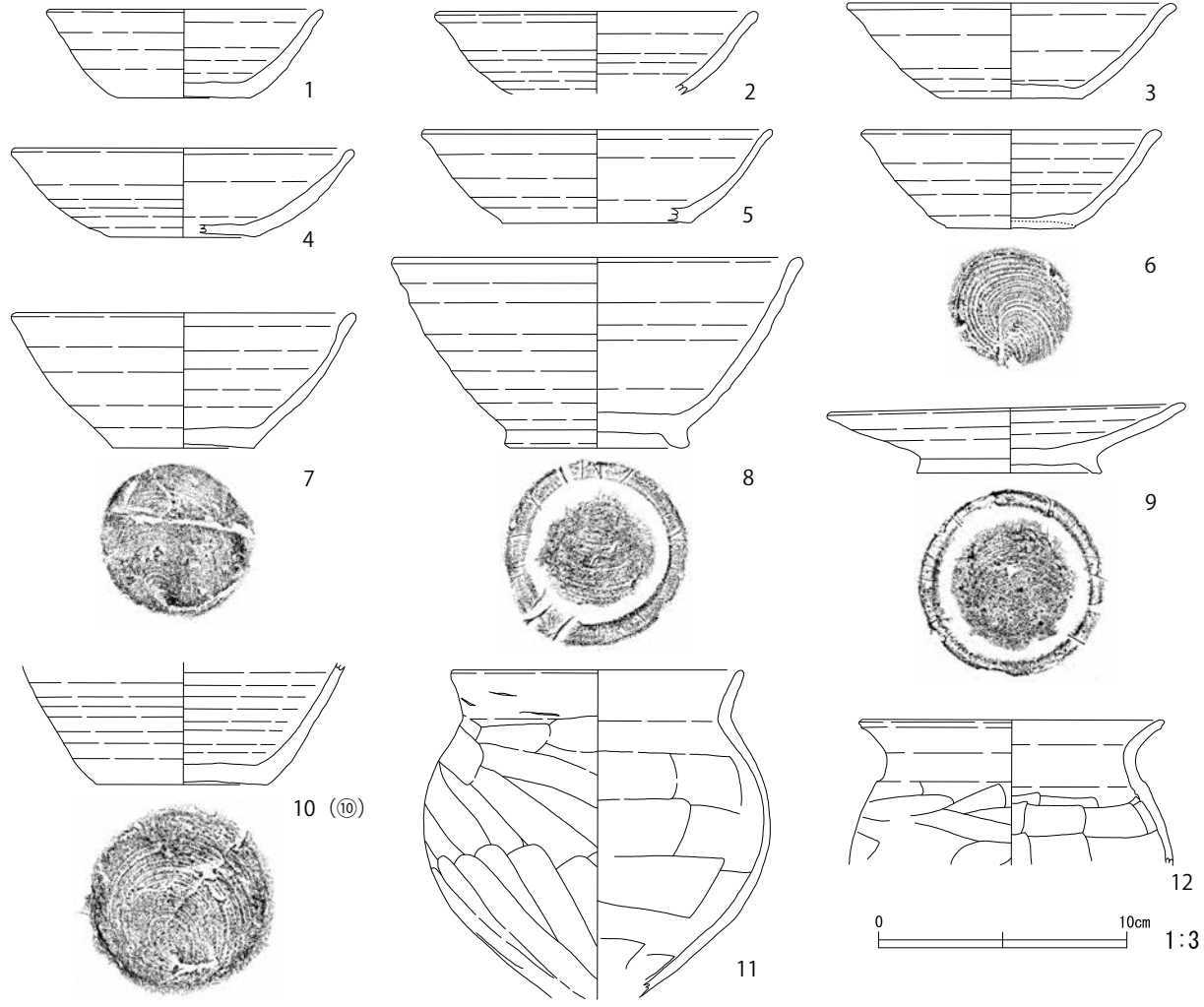
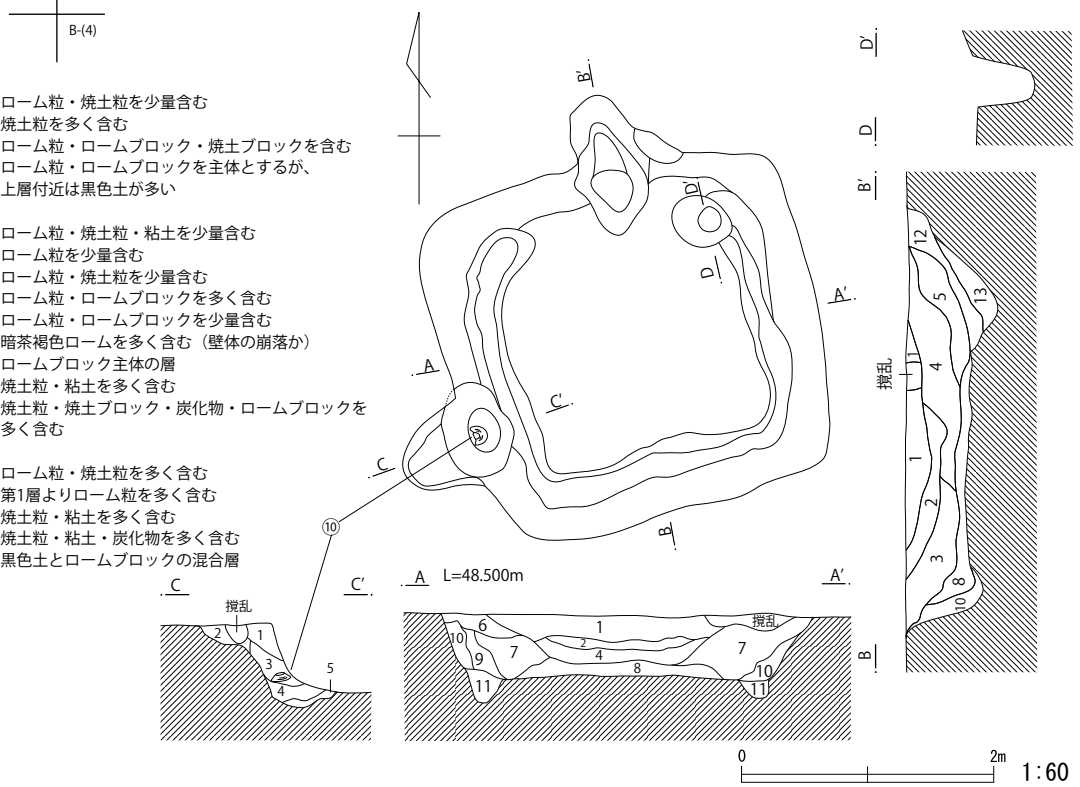
- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む
- 2 黒褐色土 焼土粒を多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロックを含む
- 4 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とするが、
上層付近は黒色土が多い

(SJ-93)

- 5 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・粘土を少量含む
- 6 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む
- 7 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む
- 8 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む
- 9 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む
- 10 暗黄褐色土 暗茶褐色ロームを多く含む (壁体の崩落か)
- 11 暗黄褐色土 ロームブロック主体の層
- 12 黒褐色土 焼土粒・粘土を多く含む
- 13 暗赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック・炭化物・ロームブロックを
多く含む

(西カマド)

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む
- 2 黒褐色土 第1層よりローム粒を多く含む
- 3 暗茶褐色土 焼土粒・粘土を多く含む
- 4 暗赤褐色土 焼土粒・粘土・炭化物を多く含む
- 5 暗黄褐色土 黒色土とロームブロックの混合層



第7図 第93号住居跡・出土遺物

している。2も東金子産の須恵坯体部の破片である。全体的に均一の厚さに仕上げられている。体部は丸みを帯び、口縁部は部分的に若干外反している。3は南比企産の須恵坯で、全体的に薄く、底部から直線的に立ち上がり、口縁部を外反させた作りになっている。4は東金子産の須恵坯で、全体的にロクロ目が顕著に見える。体部中位から体部下位で厚く、口縁部はつまんで薄く作られている。外面は丸みを帯びているが、内面は外面ほどの曲線を描かず、やや直線的に立ち上がる。5は、東金子産須恵坯の体部の破片で、若干底部も残る。底部はやや厚いが体部はかなり薄い。全体的に丸みを帯びた形に作られ、口縁部は若干外反している。6は東金子産須恵坯で、糸切り離し後に底部を継ぎ足し、若干厚めになっているのが特徴的である。体部はほぼ均一な厚さに作られているが、口縁部がやや厚手に作られているため、外面をみると外反しているように見える。7は産地不明須恵坩である。体部はきわめて薄く、底部は逆に厚く作られている。体部中位で弱く湾曲する。口縁部は厚手に作られ、若干外反している。胎土に金雲母を含む。表面に胎土中の粒子がはがれ落ちた痕と考えられる多数の小孔が確認できる。8は東金子産台付須恵坩である。体部は薄く、底部は厚く作られている。高台部分は底部と同程度の厚さで作られている。体部は僅かに丸みを帯びている。台の貼り付けが甘いことが看取できる。9は北カマドから出土した東金子産台付須恵皿である。高台のつく底部のみ、やや厚手に作られている。器と高台の接着調整は丁寧である。10は西カマドから出土した東金子産須恵坩下半の破片である。体部は薄手であるものの、底部は体部の倍以上の厚さを持つため、見た目以上に重量感がある。ロクロ目が非常に細かい。11は土師台付甕で、台部分が欠損している。口縁部は「く」字状をしており、口縁部外面は僅かに凹むように整形されている。最大径は体部中位にある。外面は著しく被熱しており、内面一部にも煤の付着が確認できる。12は土師台付甕口縁から肩部の破片である。口縁部はやや下が開く「コ」字状をしている。内外両面の一部に煤が付着している。

第94号住居跡（第8図）

調査区中央部に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は長軸長 3.20 m、短軸長 2.50 m、深さは 0.47 ~ 0.55m を測る。主軸方位は N-15° -W を指す。

カマドは北カマドで、残存状態は良好であるが、両袖および支柱は確認できなかった。平面形は長方形に近い楕円形で長軸長 1.11 m、短軸長 0.51 m、深さ 0.42 m を測る。

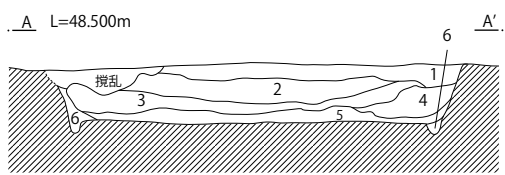
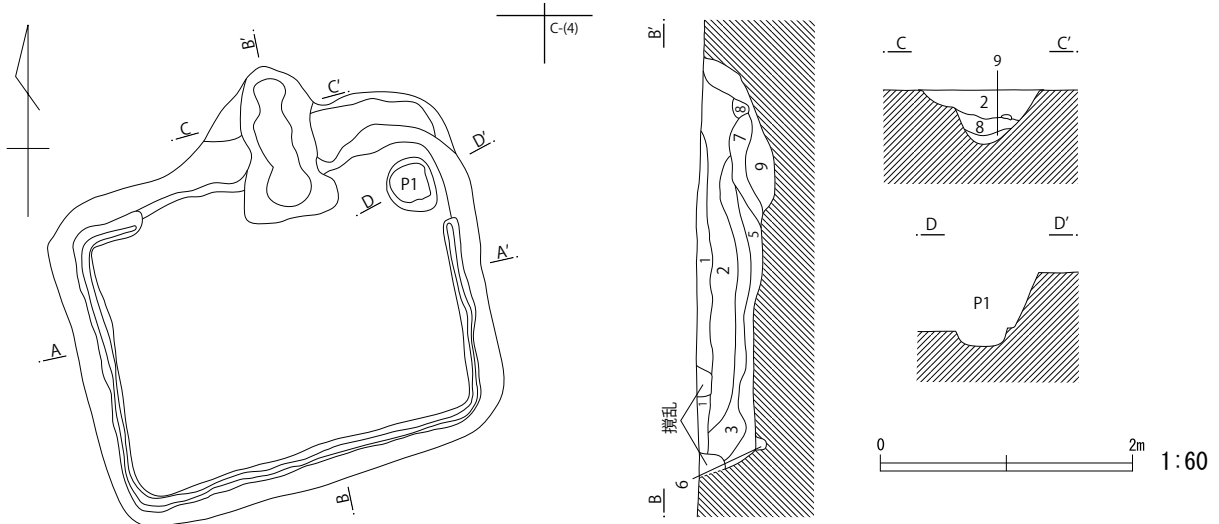
床面の残存状態は良好で、覆土は 9 層に分けられた。

壁溝は北壁の一部を除いて全体を巡る浅い壁溝がある。また、住居右上隅には貯蔵穴が確認できた。

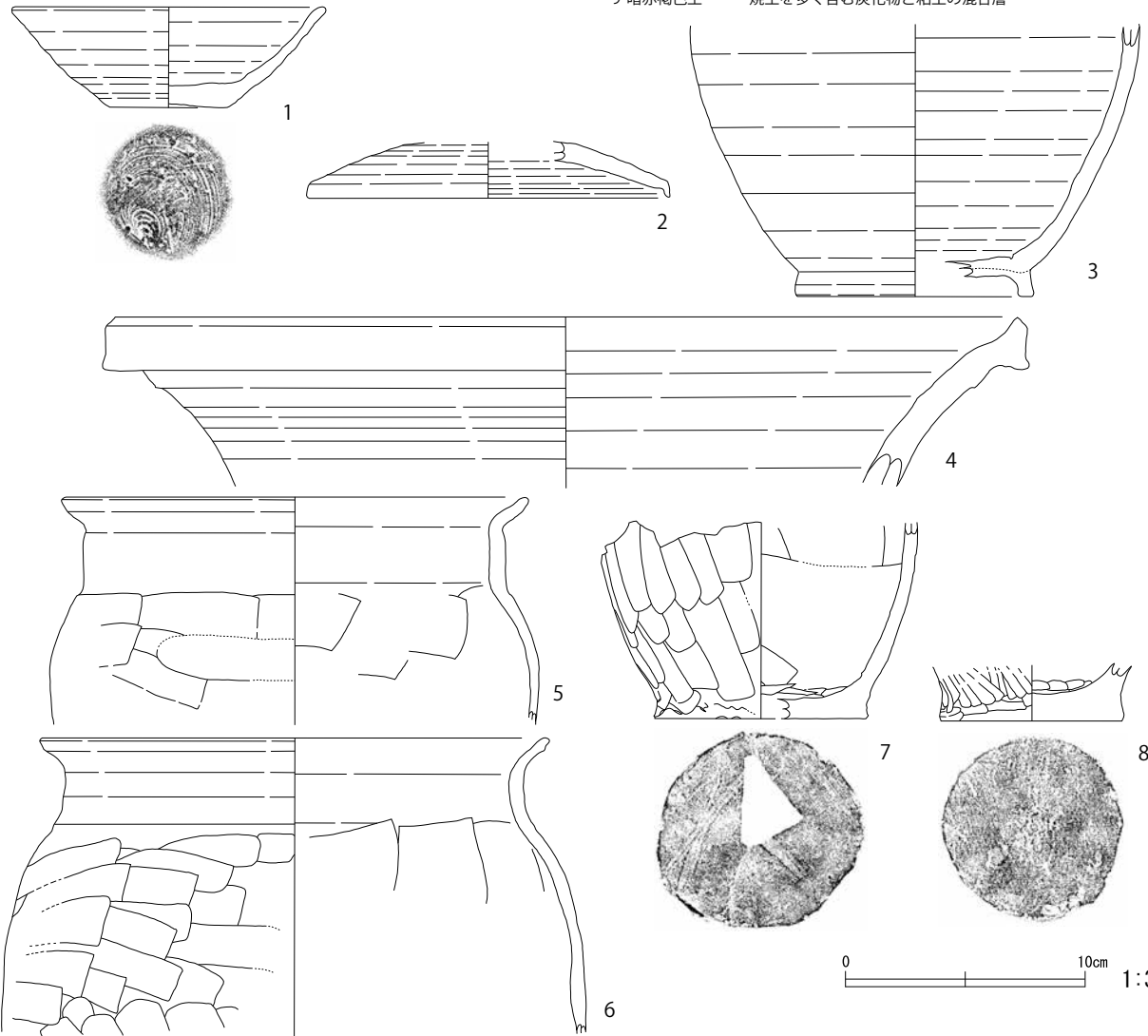
検出された遺物は須恵器、土師器で、その中の実測可能なもの 8 点を掲載した。北武蔵型と技術系統

第94号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坯	12.5	5.4	6.0	4.0	40%	石英、小礫	普通	黄褐色	底部無調整。	東金子
2	須恵蓋	14.8	—	—	—	10%	白色粒、長石、小礫	良好	明灰色	ツمامミ周辺部ヘラ削り調整。ツمامミ自体は欠損。	東金子
3	須恵瓶	—	9.6	—	—	20%	白色粒、小礫	良好	暗茶褐色	貼付高台。底部補強のため継ぎ足した痕がある。	東金子
4	須恵長頸瓶	37.0	—	—	—	5%	白色粒、石英	良好	暗灰色	内面に降灰を受け、外面に釉が薄く付着している。	東金子
5	土師甕	18.8	—	—	—	30%	石英	良好	茶褐色	口縁部「コ」字。	在地
6	土師甕	20.6	—	—	—	30%	石英、小礫	良好	茶褐色	口縁部「コ」字下部開く。全体的に歪んでいる。	在地
7	土師甕	—	8.6	—	—	20%	赤色粒子	普通	明褐色	底部にヘラ削り痕が看取できる。欠け口に煤付着。	在地？
8	土師甕	—	7.4	—	—	15%	赤色粒子	普通	黄褐色	底部にヘラ削り痕が看取できる。	在地？



- (SJ-94)
- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 黒色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む |
| 2 黒褐色土 | 濃い黒色を呈するが、ローム粒・焼土粒を多く含む |
| 3 黒褐色土 | 第2層よりローム粒を多く含む |
| 4 黒褐色土 | 第3層より茶色に近くなり、焼土を多く含む |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を多く含み、カマド付近は粘土が混入する |
| 6 暗黄褐色土 | ロームブロックを多く含む(壁体の崩落か) |
| 7 黒褐色土 | 粘土を多く含む |
| 8 暗黄褐色土 | ロームブロック主体の層 |
| 9 暗赤褐色土 | 焼土を多く含む炭化物と粘土の混合層 |



第8図 第94号住居跡・出土遺物

の異なる土師甕が出土している。1は東金子産須恵坏である。ロクロ目が顕著で、体部は薄く、底部は厚手に作られている。底部から直線的に立ち上がり、体部下位でごく僅かに湾曲している。口縁部は若干外反している。2は東金子産須恵蓋の破片で鈕の部分は欠損している。中心部は大分厚手に作られているが、カエリ部分は逆にかなり矮小化されている。3は東金子産須恵台付甕下半の破片である。底部を含めてほぼ均一な厚さで作られており、高台部も同様の厚さのため、安定感のある外観を呈している。内底部と体部との接合部にヘラ整形時にできた溝が確認できる。4は東金子産須恵長頸瓶口縁部の破片である。外面はやや光沢を帯びた形に仕上がっているが、内面は降灰を受けて荒れている。5は土師台付甕の口縁部から肩部の破片である。器厚は口縁部で厚く、体部で薄い。口縁部断面形は「コ」字状をしており、口縁部と体部の境が明確に段になっている。6は土師甕上半の破片である。器厚は全体的に均一である。口縁部断面形は若干下が開き気味の「コ」字状をしている。口唇部外面が面になっている。7は土師甕底部周辺の破片である。底部は体部に比べて倍程度に厚く、外面にはヘラ削り調整の痕がある。内・外面ともに煤が付着し、欠け口（断面）にも煤が付着していることから、破損後も使用していた可能性がある。8も土師甕底部の破片である。底部は厚手でヘラによる調整が看取できる。7に比べてややヘラ調整が細かい。

第95号住居跡（第9図）

調査区中央部東側に位置する。平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は長軸長 3.96 m、短軸長 3.62 m、深さは 0.48～0.55m を測る。主軸方位は N-0° -W を指す。

カマドは北カマドで、残存状態は良好であり、両袖および支柱石も確認できた。平面形は三角形で南北長 1.50 m、東西長 1.45 m、深さ 0.55 m を測る。

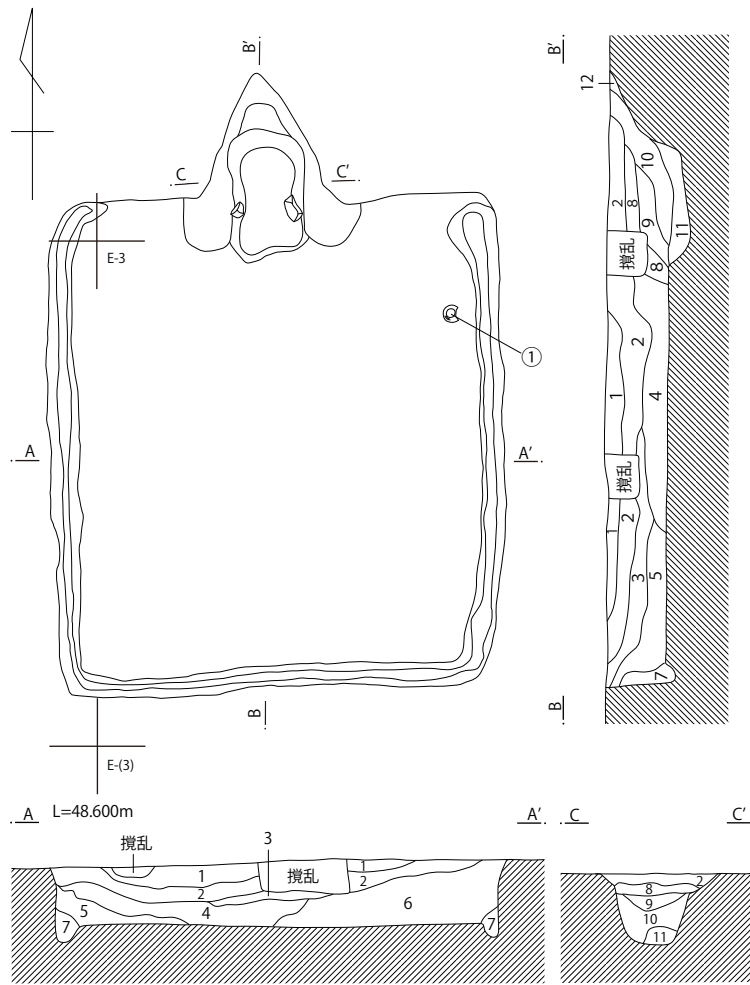
床面の残存状態は良好である。覆土は 11 層に分けられた。

壁溝は北壁の一部を除いて全体を巡る浅い壁溝がある。

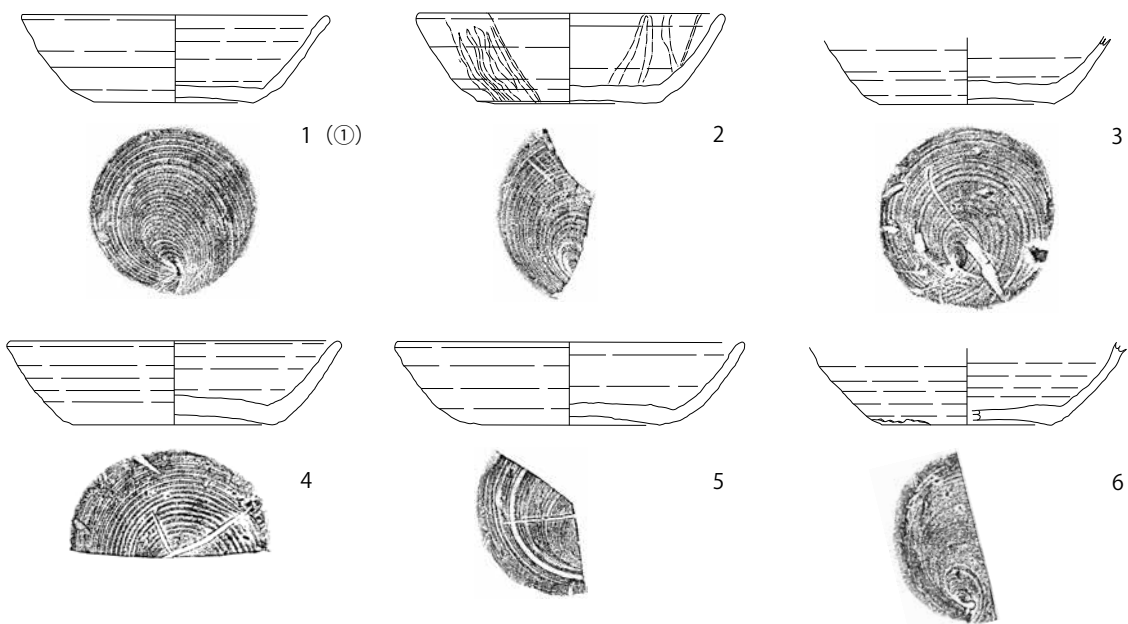
検出された遺物は須恵器、土師器で、その中の実測可能なもの 6 点の須恵器を掲載した。1は南比企産須恵坏で、体部より底部が厚手につくられている。体部は直線的に開き、内底部と体部の接合部に爪先が触れてつけられたと考えられる溝が看取できる。2は東金子産須恵坏である。底部は体部に比べてやや厚手に仕上げられている。体部はやや丸みを帯びて成形され、口縁部内面に弱い段が確認できる。内面、外面ともに火襷痕がみられ、口縁部には自然釉がかかっている。器面には多数の孔がみられる。3も東金子産須恵坏下半の破片である。底部は厚く、体部はそれより大分薄く作られている。底部外面に回転糸切り時に粘土塊が付着し、そのまま焼成されている。土器全面に煤が付着している。4も東金子産須恵坏である。体部は底部よりやや薄手に作られ、ほぼ直線的に立ち上がる。底部外面にヘラ記号「×」が確認できる。5は東金子産須恵坏で、体部は底部よりやや薄手に作られ、丸みを帯びて立ち上がる。底部外面に

第95号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	11.9	6.1	6.8	3.4	80%	白色粒、小礫	良好	暗茶褐色	底部無調整。内面の底部と体部の境が明瞭になっている。	東金子
2	須恵坏	11.7	7.0	6.8	3.4	40%	白色粒、小礫	良好	灰色	底部無調整。表面多孔。火襷が看取できる。	東金子
3	須恵坏	—	6.8	7.0	—	50%	白・黒色粒、石英、小礫	普通	明灰褐色	底部無調整。	東金子
4	須恵坏	12.6	8.6	7.5	3.3	45%	白色粒、石英、長石	良好	赤褐色	底部無調整。底部外面にヘラ記号「×」有。	東金子
5	須恵坏	13.4	8.4	8.0	3.2	40%	白色粒、長石	普通	明茶褐色	底部無調整。底部外面にヘラ記号「×」有。	東金子
6	須恵坏	—	6.6	7.0	—	40%	白・黒色粒	普通	明灰色	底部無調整。切り離した後、バリを撫で付けた痕有。	東金子



- (SJ-95)
- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む |
| 2 黒褐色土 | 第1層よりローム粒を多く含む |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロックを多く含む |
| 4 黒褐色土 | やや濃い黒色を呈し、カマド付近に粘土・焼土が多く混入する |
| 5 黒色土 | ロームブロックを少量含む |
| 6 暗茶褐色土 | ローム粒を多く含む |
| 7 暗黄褐色土 | ローム主体の層 |
| 8 暗灰褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土を多く含む |
| 9 黒褐色土 | 第8層より濃い黒色を呈し、ローム粒・焼土粒を多く含む |
| 10 暗赤褐色土 | ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを多く含む |
| 11 黒色土 | ロームブロック・焼土粒を少量含む |



0 10cm 1:3

第9図 第95号住居跡・出土遺物

ヘラ記号「×」が確認できる。6は東金子産須恵埴下半の破片である。底部と体部の接合部が厚く作られるが、他の部分は基本的に薄手である。体部は丸みを帯びて立ち上がる。

第96号住居跡（第10・11図）

調査区中央部西側に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は長軸長 5.40 m、短軸長 3.50 m、深さは 0.48 ～ 0.54m を測る。主軸方位は N-10° -W を指す。第 56 号土壙と重複し、土壙が新しい。

カマドは北カマドで残存状態は良好であり、両袖および支柱石も確認できた。平面形は三角形で南北長 1.72 m、東西長 1.60 m、深さ 0.78 m を測る。

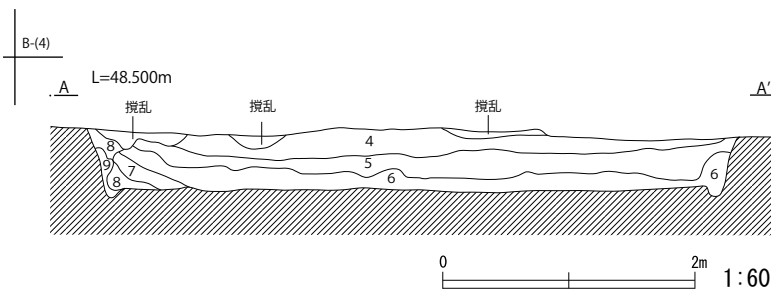
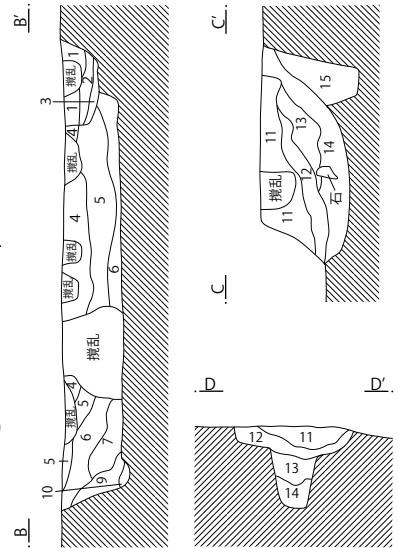
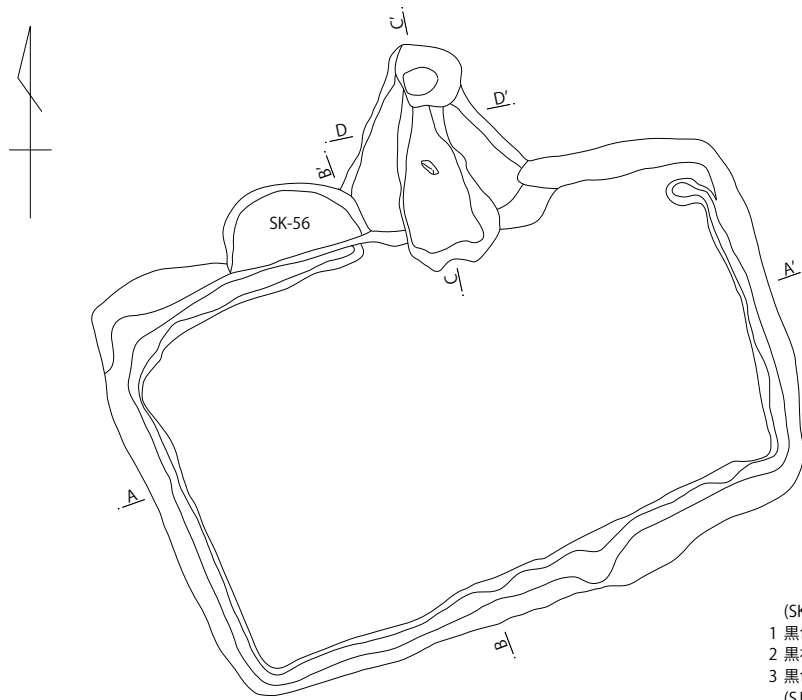
床面の残存状態は良好で、覆土は 15 層に分けられる。カマド位置より南方向床面に焼土痕があった。壁溝は北東部を除いて全体を巡る浅い壁溝がある。

カマド西側に第 56 号土壙があるが、切り合い関係から、本住居跡が土壙に比べて古いことが看取できた。

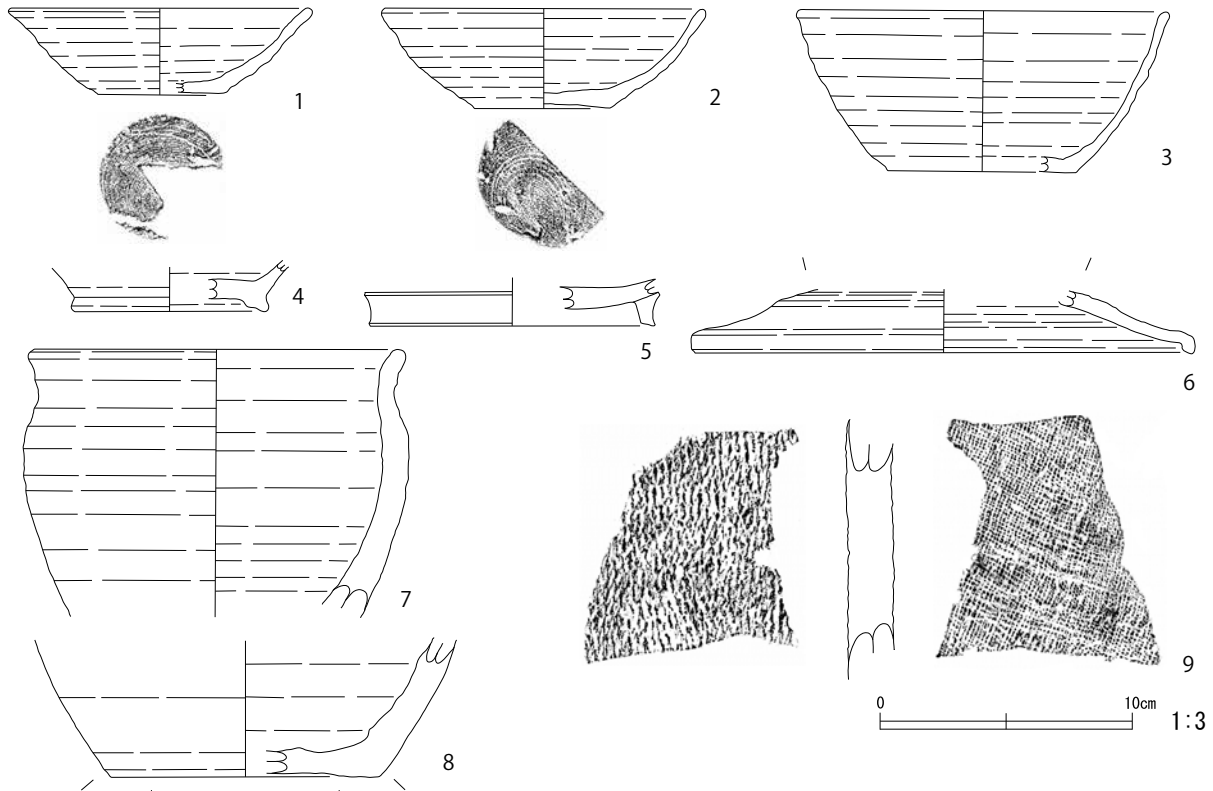
検出された遺物は須恵器、土師器で、その中の実測可能な 12 点を掲載した。1 は東金子産の須恵坏である。体部は底部から直線的に立ち上がり、中位で若干内湾し、口縁部は逆に若干外反する。2 も東金子産の須恵坏で、底部外周が体部に比べて若干厚手に作られている。器形は底部から直線的に立ち上がり、体部中位で内湾している。3 は東金子産須恵埴の底部の一部から口縁部までの破片である。やや薄手に作られ、口縁部に向かうにつれロクロ目が顕著に見えるようになる。器形は底部から緩やかに内湾しつつ立ち上がる。口縁部外面に被熱痕がある。4 は東金子産須恵高台付坏の高台周辺部分の破片である。底部および高台部は厚手に作られているが、残存する体部はかなり薄手に作られている。高台は低く、扁平である。5 は東金子産須恵高台付皿の高台部の破片である。高台部は高台の高さがその厚さを上回り、貼付部外側に沈線が巡っている。6 は南比企産の須恵蓋である。返しの外面は接地させるとほぼ垂直に立ち上がっていることがわかる。また、かなり磨耗していることが看取できる。7 は須恵甕の口縁部から体部下位の破片である。全体的に厚手に作られているが、口縁部のみ外部分に比べると若干薄い。口縁部および肩部に降灰を受けており、外面の 50 パーセント程度は自然釉がかかっている。8 は、須恵甕の底部から体部下位の破片である。全体的に厚手に作られており、内面の底部と体部の接合面に明確な段がある。胎土を

第96号住居跡 出土遺物観察表

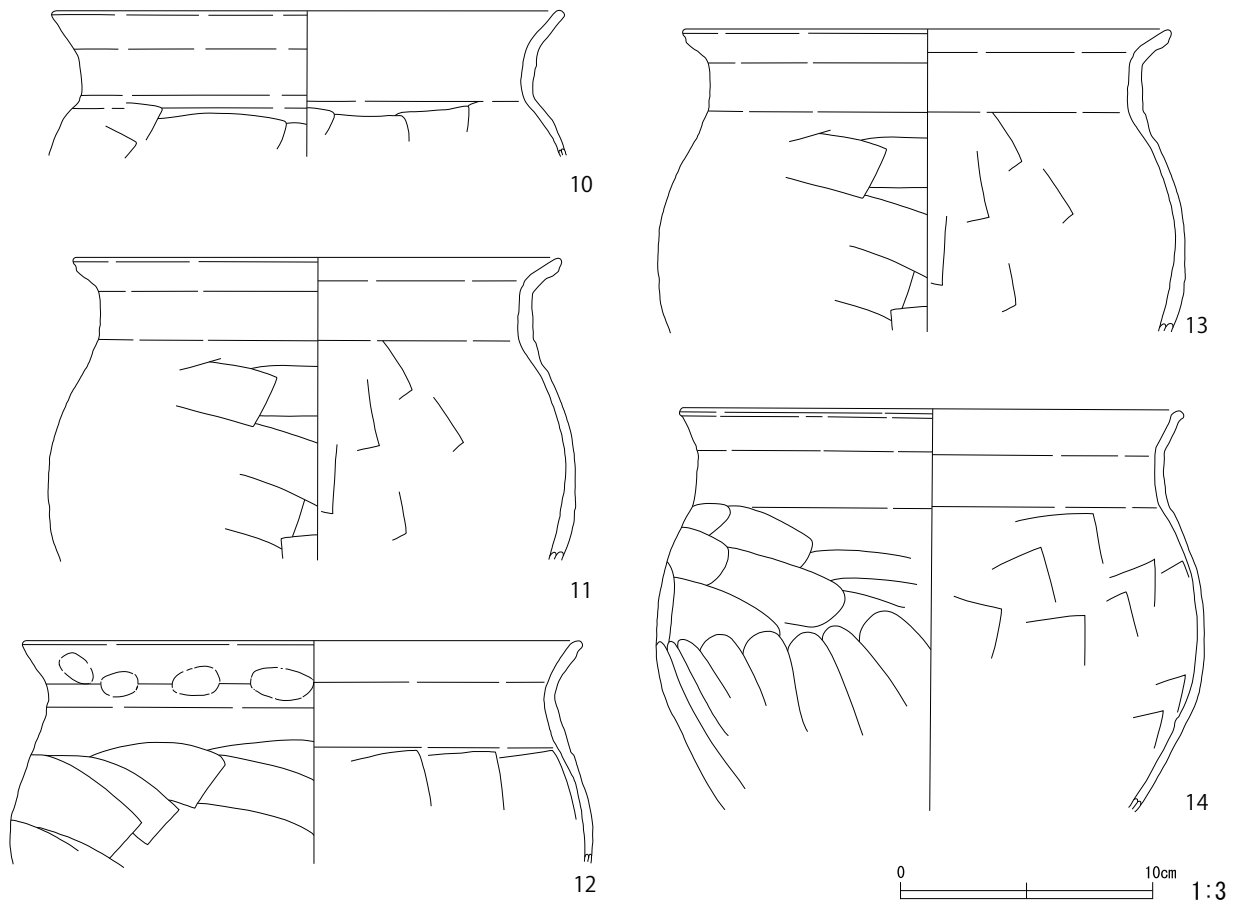
No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	11.5	5.0	4.2	3.4	50%	白色粒、長石、小礫	良好	灰色	底部無調整。	東金子
2	須恵坏	12.4	5.3	5.1	3.9	100%	白色粒、長石	良好	暗灰色	底部無調整。	東金子
3	須恵埴	7.2	7.4	6.4	5.2	10%	白色粒、長石、小礫	良好	灰色	底部無調整。	東金子
4	須恵高台付埴	—	7.4	6.6	—	10%	白色粒、長石	普通	灰色	底部無調整。貼付高台外周部が接地する。	東金子
5	須恵高台付皿	—	11.0	—	—	5%	白色粒、長石	良好	暗赤褐色	底部無調整。貼付高台外周部が接地する。	東金子
6	須恵蓋	19.4	—	—	2.3	10%	白色針状	不良	黄褐色	口縁部にカエリ有。ツمامミ周辺にヘラ削り痕有。	南比企
7	須恵甕	14.0	—	—	—	5%	白色粒、長石、小礫	良好	明灰色	口縁部内面と肩部外面に若干降灰を受けている。	東金子
8	須恵甕	—	10.4	—	—	10%	黒色粒、長石	良好	明灰色	底部周辺回転ヘラ削りが体部下端に及ぶ。	搬入品
9	平瓦	—	—	—	—	5%	白色粒、小礫	良好	灰色	内面に布目、外面に叩き目が看取できる。	東金子
10	土師甕	19.5	—	—	—	5%	白色粒、石英	良好	暗褐色	口縁部「コ」字、やや上部開く。	在地
11	土師甕	18.8	—	—	—	5%	白色粒、石英	良好	赤褐色	口縁部「コ」字、下部やや開く。	在地
12	土師甕	20.6	—	—	—	10%	白色粒、石英	良好	暗赤褐色	口縁部「コ」字、下部開く。	在地
13	土師甕	18.8	—	—	—	20%	白色粒、石英	良好	明黄褐色	口縁部「コ」字。外面は 2 次焼成の痕が顕著に見られる。	在地
14	土師甕	19.2	—	—	—	10%	白色粒、石英、小礫	良好	暗茶褐色	口縁部「コ」字。	在地



- (SK56)
- | | |
|----------|---------------------------|
| 1 黒色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む |
| 2 黒褐色土 | ローム粒を多く含む |
| 3 黒色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む |
| (SJ-96) | |
| 4 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む |
| 5 黒褐色土 | 第4層よりローム含有量が若干少ない |
| 6 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロックを多く含み、一部主体を成す |
| 7 黒褐色土 | 第6層よりローム含有量が少ない |
| 8 暗黄褐色土 | ローム主体の層 |
| 9 暗黄褐色土 | 黒色土とロームブロックの混合層 |
| 10 暗黄褐色土 | ロームブロック主体の層 |
| 11 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む |
| 12 黒褐色土 | 粘土を多く含む |
| 13 灰色粘土層 | 粘土主体の層 |
| 14 黒褐色土 | 焼土粒・焼土ブロックを多く含む |
| 15 暗茶褐色土 | ローム主体の層 |



第10図 第96号住居跡・第56号土壌・出土遺物(1)



第 11 図 第 96 号住居跡 出土遺物 (2)

観察した限りでは、在地製品ではない可能性が高いといえる。9は東金子産平瓦の破片である。内側に布目、外側に深いタタキ目が施されている。10は土師甕の破片である。口縁部は上部がやや直立しかけた「く」字状を呈している。器厚は口縁部で厚く、肩部にいくにつれ薄くなっている。11も土師甕の口縁部から肩部までの破片である。口縁部は「コ」字状を呈しており、口縁部と肩部の境には明確な段がある。口縁部で厚く、肩部は若干薄く作られている。12も土師甕の口縁部から体部中位までの破片である。口縁部は下が開く「コ」字状口縁で、端部には沈線が巡っている。13も土師甕の破片で、口縁部は「コ」字状をしている。肩部は外と比べてやや薄く作られている。最大径は体部中位にある。全体的に二次焼成の痕がみられる。14は土師甕の口縁部から体部中位までの破片で、口縁部は「コ」字状を呈している。全体的に均一な厚さに作られており、最大径が体部中位にある。

第 97 号住居跡 (第 12 図)

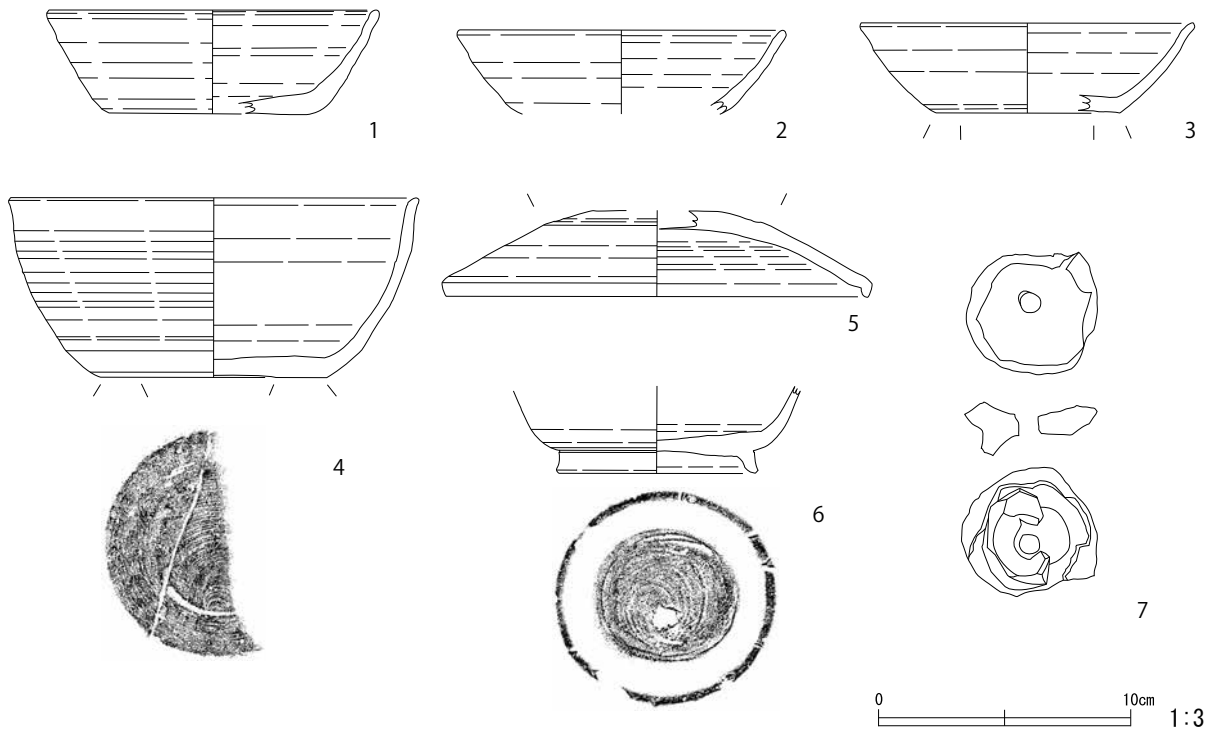
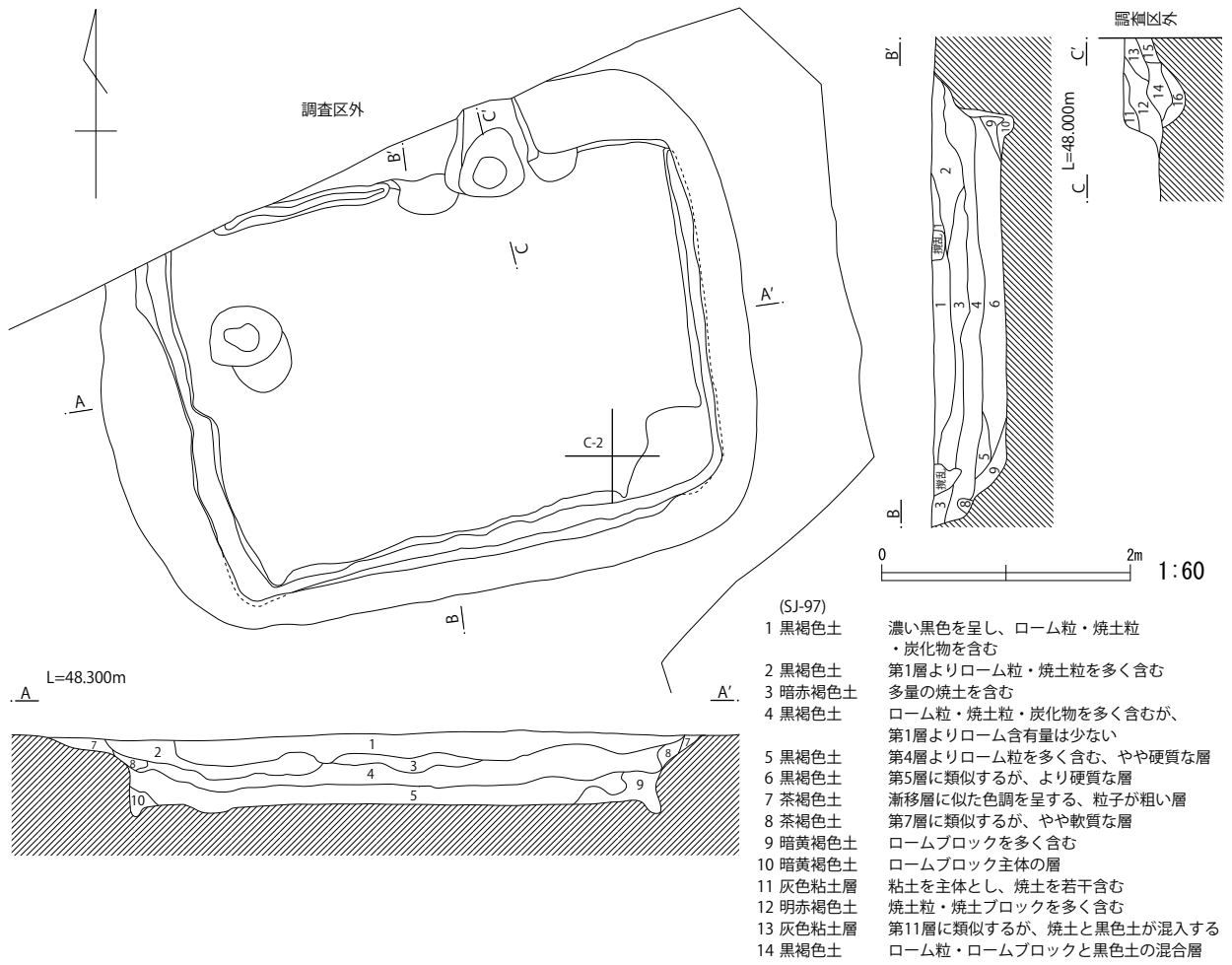
調査区中央部北端に位置する。本調査では全体の約 8 割が検出されており、残りは調査区外である。

平面形は東西に長い長方形を呈し、周囲に 0.30～0.50m 程度の掘り込みが確認できる。規模は掘り込みも含めて長軸長 5.24 m、短軸長 3.88 m、深さは 0.68m である。主軸方位は N-8° -W を指す。

カマドは北カマドで約 8 割が検出された。煙道を含めたカマド先端部は調査区外である。残存状態は良好で、両袖は確認できたが、支柱石は確認できなかった。平面形はおそらく南北に長い三角形で、南北長は確認できる部分で 0.78 m、東西長は 0.80 m、深さは 0.50 m を測る。

床面の残存状態は良好で、覆土は 14 層に分けられた。

壁溝は浅く、北東部を除いて全体を巡る。壁自体はややオーバーハング気味に掘られている。



第12図 第97号住居跡・出土遺物

第 97 号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	12.5	8.0	7.2	4.5	20%	白色粒、長石	良好	暗灰色	底部無調整。	東金子
2	須恵坏	12.4	—	—	3.5	20%	白色粒、長石、小礫	良好	灰色	底部欠損。	東金子
3	須恵坏	13.0	7.2	7.0	3.5	40%	白色粒子、小礫	良好	暗灰色	底部周辺回転ヘラ削り。	東金子
4	須恵碗	15.8	8.8	8.6	7.0	60%	白色針状、黒色粒	普通	乳白色	底部周辺回転ヘラ削り。	南比企
5	須恵蓋	16.4	—	—	3.4	30%	白色粒、小礫	普通	暗灰色	ツمامミ周辺部ヘラ削り調整。ツمامミ自体は欠損。	東金子
6	須恵高台付坏	—	8.0	—	—	50%	砂鉄、白色粒	良好	暗灰色	底部無調整。貼付高台。	東金子
7	土師紡錘車?	5.5	—	—	2.1	—	赤色粒、小礫	良好	赤褐色	土師台付甕の体部と台部の接合点を使用。孔径 0.8cm。	在地

検出された遺物は須恵器、土師器で、その中の実測可能なもの 7 点を掲載した。1 は東金子産須恵坏で、底部が厚手に作られているが、口縁部に向かうにつれ薄くなっていく。底部から直線的に開いて立ち上がるが開きは急ではなく、器形は箱型に近い。2 も東金子産須恵坏の破片で、底部を欠く。体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部の断面形は僅かに緩やかな「S」字状をなしている。3 も東金子産の須恵坏で、底部の一部から口縁部までの破片である。器厚は全体的に均一で、器形は底部から直線的に立ち上がり、体部が若干丸みを帯びている。口縁部の断面形は緩やかな「S」字状を呈している。4 は南比企産須恵碗である。底部がやや厚手に作られている。体部は丸みを帯び、口縁部は外反している。外面にロクロ目が細かく見え、底部の周辺回転ヘラ削りが体部下位にまで及んでいることが看取できた。5 は東金子産須恵蓋で、鈕は欠損している。天井部はやや厚手に作られ、薄くなり始める部分に爪もしくはヘラでつけた溝が一条巡っている。6 は東金子産の須恵高台付坏の高台部から体部中位までの破片である。底部の中心は薄くなっているが、周辺部は厚手で、体部はまた薄く作られている。高台貼付部に明確な沈線が看取できる。7 は土師台付甕の底部片を両方向から穿孔されているもので、紡錘車と考えられるが、重心と中心軸がずれているため利用しづらく、断定はできない。

第 98 号住居跡 (第 13 図)

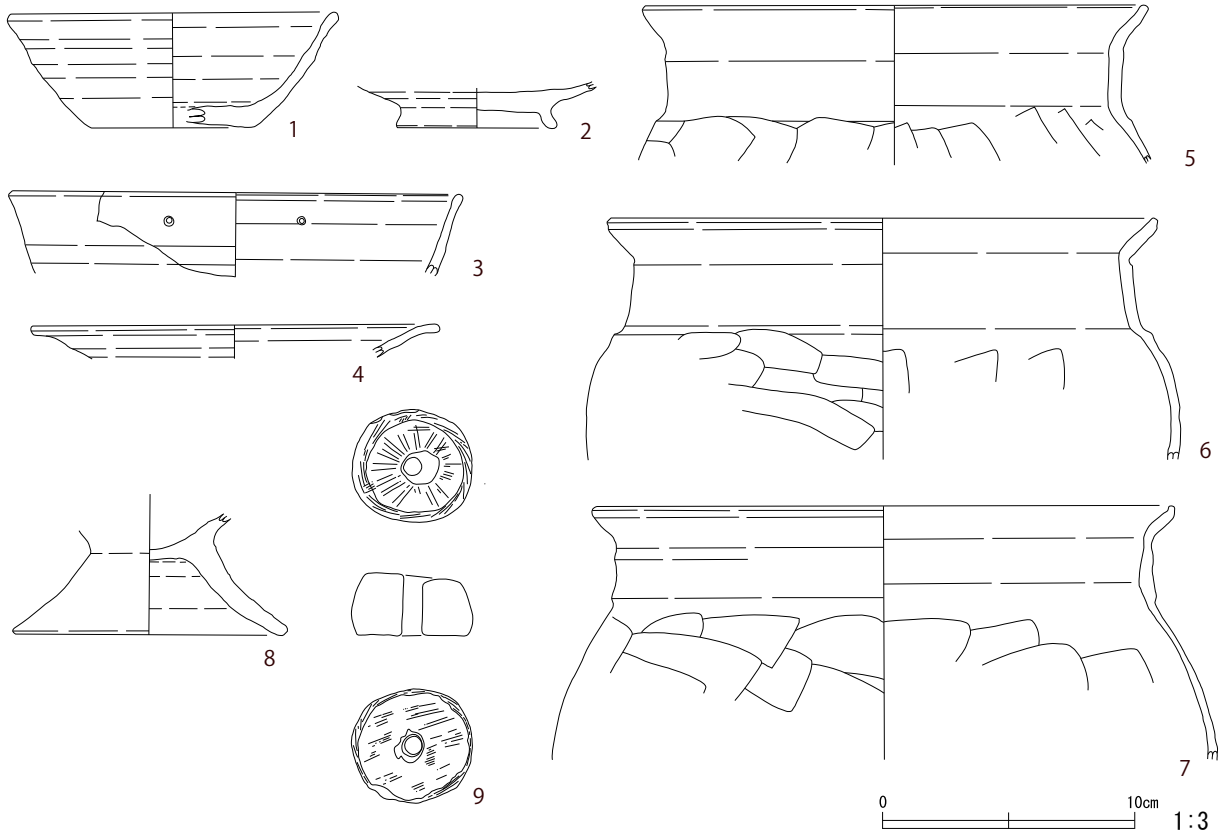
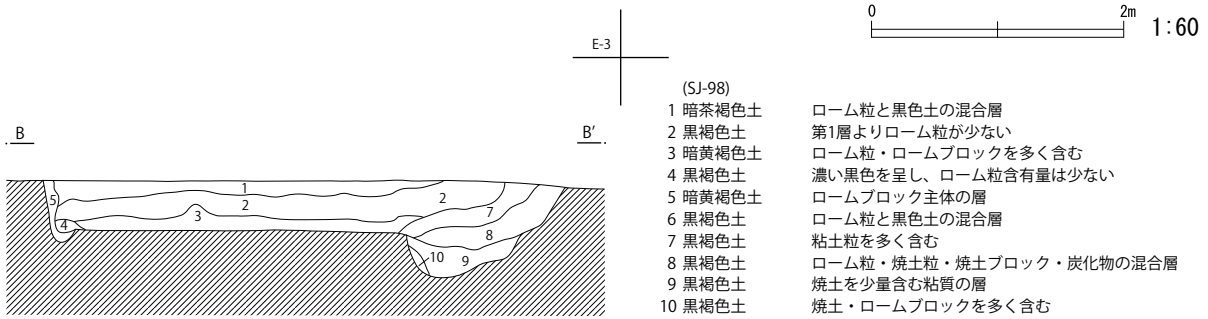
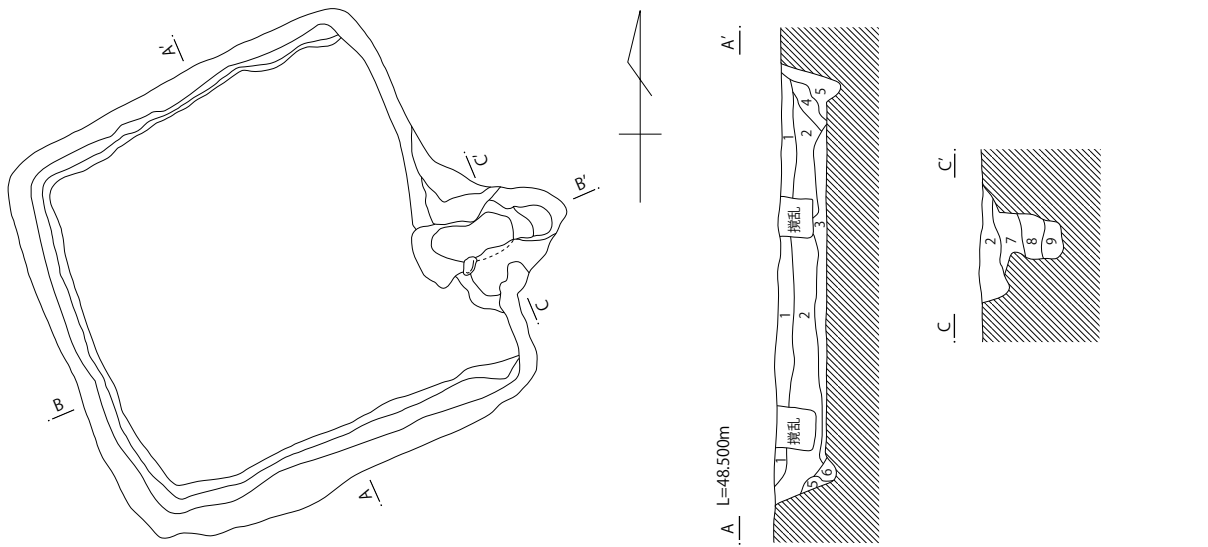
調査区中央部東側に位置する。平面形は一辺およそ 3.50 m の正方形を呈し、深さは最大 0.50m を測る。主軸方位は N-68° -E を指す。

カマドは住居の東に構築されていた。残存状態は良好で、両袖および支柱石が確認できた。カマドの平面形は三角形で南北長 1.25 m、東西長 1.20 m、深さは 0.64 m を測る。

床面も残存状態は良好で、覆土は 10 層に分けられた。

壁溝は浅く、北壁を除いて全体を巡っていた。

検出された遺物は須恵器、土師器、石製品で、その中の実測可能なもの 9 点を掲載した。1 は東金子産須恵坏で、全体的にロクロ目が目立つ製品である。底部は厚手に作られているが体部は逆に薄手で、口縁部まで直線的に立ち上がる。2 は東金子産須恵高台付皿の台部から体部下位の破片である。底部は厚く作られているが、高台より外側になる体部は薄く作られている。高台の貼り付けは堅緻で、接地する面は丸みを帯びている。台部と底部の接合痕が丁寧に調整されているためほとんどみえない。3 は東金子産須恵碗の口縁部の破片である。大型の口径を持つ割に薄手に作られており、単なる碗ではなく陵碗の可能性もある。体部に内外両方向から穿孔されている。4 は東金子産須恵皿口縁部の破片である。薄く作られ、口縁部は明確に外反している。胎土は 2 と類似し、同一固体の可能性もある。5 は土師甕口縁部の破片で口縁部は直立した「コ」字状をなし、内面の一部に二次焼成を受けた痕がある。6 は土師甕の口縁部から体



第13図 第98号住居跡・出土遺物

第 98 号住居跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	12.6	6.2	5.6	4.4	40%	長石、小礫	不良	白灰色	底部無調整。	東金子
2	須恵高台付皿	—	6.0	—	—	40%	白色粒、長石、石英	良好	暗灰色	底部無調整。貼付高台で、貼付後のナデが丁寧。	東金子
3	須恵埴	17.6	—	—	—	5%	黒色粒	普通	乳白色	穿孔有。粉っぽい手触り。陵埴か？	東金子
4	須恵皿	15.8	—	—	—	5%	白色粒、長石、石英	良好	暗灰色	2の高台付皿と同一体の可能性有。	東金子
5	土師甕	19.4	—	—	—	10%	白色粒、長石、石英	良好	茶褐色	口縁部「コ」字。	在地
6	土師甕	21.2	—	—	—	30%	雲母、石英	普通	明赤褐色	口縁部「コ」字、下部やや開く。	在地
7	土師甕	22.8	—	—	—	20%	雲母、石英	普通	明褐色	口縁部「コ」字。	在地
8	土師台付甕	—	10.4	—	—	10%	白色粒、長石、石英、小礫	良好	明黄褐色	台部分のみ。	在地
9	石製紡錘車	4.7	3.5	—	2.4	100%	滑石	—	—	孔径 1.4cm。短径側には整形痕、長径側には摩擦痕、側面には回転摩擦痕有。	—

部中位までの破片で口縁部は下位が開く「コ」字状になっている。7は土師甕の口縁部から体部中位までの破片で口縁部は「コ」字状を呈し、口唇部には受け口が存在する。肩部は非常に薄く作られ、外面には油煙が付着している。8は土師台付甕台部である。台部は厚手で、それに比べて体部はやや薄く作られている。9は石製紡錘車である。僅かに楕円形になっており、外部側面には数箇所剥離した痕がある。また、孔周辺にも使用によるものと考えられる剥離痕がある。

掘立柱建物跡

第 14 号掘立柱建物 (第 14 図)

調査区南西部に位置する。3 × 2 間の南北棟の側柱建物である。

全体の規模は桁行長 5.42 m、梁行長 3.85 mを測り、主軸方向は N-7° -W を指す。桁行長は 1.80 m、梁行長は 1.90 mを基本とする。柱穴は円形が主体で、規模は径 0.60 m前後、深さは 0.40 m～ 0.50 mを測る。柱痕は確認できなかった。

検出された遺物は須恵器・土師器で、その中の実測可能なもの 2 点を掲載した。1は須恵坏の口縁部から底部の一部までの破片である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。体部内側の上位は降灰を受けている。2は土師台付甕の肩部の破片と考えられるもので、頸部との境に沈線が 2 条入っている。調整は三河や遠江で使用される技法に似ており、外面は全体的に、内面には部分的に刷毛目が看取できる。

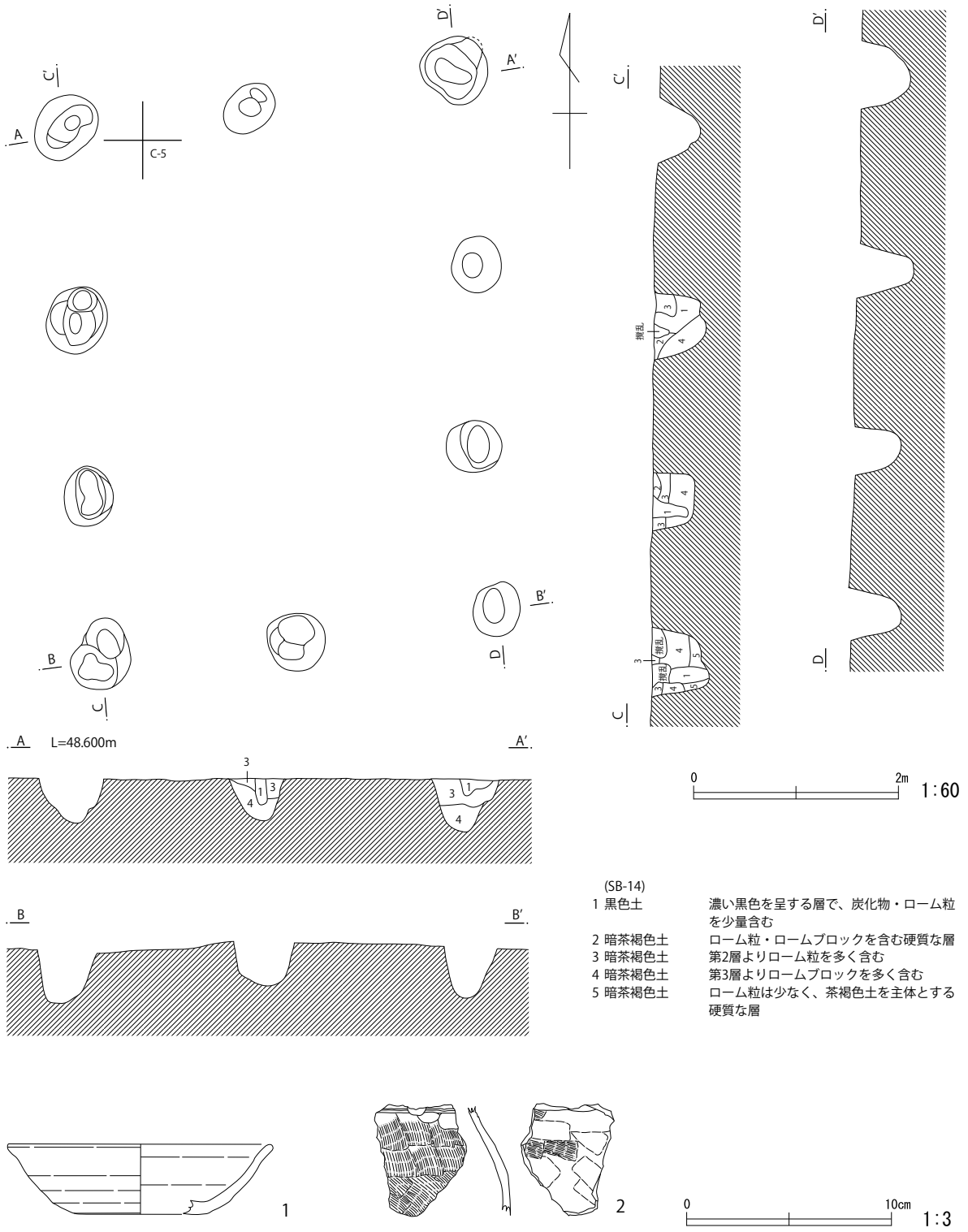
第 14 号掘立柱建物跡 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵坏	12.6	6.2	6.2	3.3	15%	白・黒色粒	良好	暗灰色	底部無調整。体部内面上位に降灰。	東金子
2	土師甕	—	—	—	—	1%	白色粒	良好	明茶褐色	頸部に沈線が 2 本巡るか。内外面に刷毛目が看取できる。	搬入品

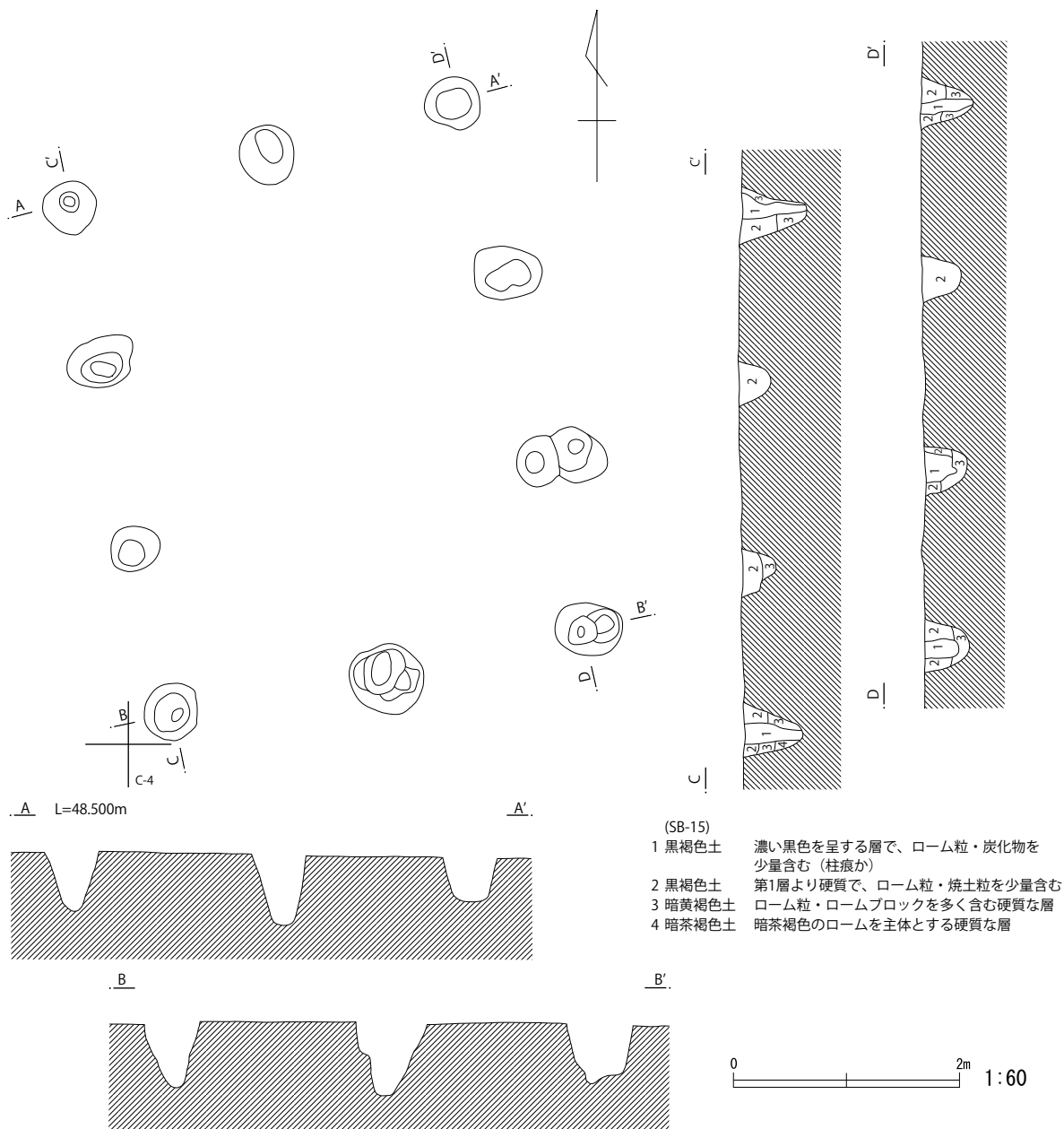
第 15 号掘立柱建物 (第 15 図)

調査区中央部に位置する。3 × 2 間の南北棟の側柱建物である。

全体の規模は桁行長 4.82 m、梁行長 3.63 mを測り、主軸方向は N-12° -W を指す。桁行長は 1.60 m、梁行長は 1.80 mを基本とする。柱穴は円形が主体で、規模は径 0.60 m前後、深さ 0.50 m～ 0.60 mを測る。柱痕らしきものを数点確認した。



第 14 図 第 14 号掘立柱建物跡・出土遺物



第 15 図 第 15 号掘立柱建物跡

土壇

第 45 号土壇 (第 16 図)

第 14 号掘立柱建物の南に位置する。平面形は円形、断面形は長方形に近い逆台形の土壇で、規模は径 1.92m、深さ 0.50m を測る。土層は 3 層に分けられたが、焼土等は確認されなかった。遺物として覆土から東金子産須恵器坏底部の破片が出土している。

第 46 号土壇 (第 16 図)

第 14 号掘立柱建物の南に位置する。平面形はやや歪んだ円形で、断面形は長方形に近い逆台形である。径 1.50m、深さ 0.55m を測り、土層は 3 層に分けられた。土壇中央部に礫がライン状に敷いてある。土

墳墓の可能性もあるが、正確な遺構の性格等詳細は不明である。覆土から東金子産須恵器坏底部の破片が出土している。

第 47 号土壙 (第 16 図)

第 14 号掘立柱建物の東に位置する。平面形は円形で、断面形は長方形である。径は 1.55m、深さは 0.83m を測り、土層は 4 層に分けられた。西側が若干オーバーハングしている。覆土から東金子産須恵器坏の底部から口縁部までの破片が出土している。

第 48 号土壙 (第 16 図)

第 14 号掘立柱建物の東に位置する。平面形は円形で、断面形は長方形に近い逆台形である。規模は径 1.75m、深さ 0.50m を測り、土層は 3 層に分けられる。遺物は出土しなかった。

第 49 号土壙 (第 16 図)

第 93 号住居跡の北東に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形である。規模は径 1.00m、深さ 0.08m を測る。浅すぎるため土層は分けられず、遺物も出土しなかった。

第 50 号土壙 (第 16 図)

第 96 号住居跡の北に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形である。規模は径 1.62m、深さ 0.40m を測り、土層は 2 層に分けられた。自然堆積ではなく、人為的に埋め立てられたものと考えられる。

第 51 号土壙 (第 16 図)

第 96 号住居跡の北に位置する。平面形は円形で、断面形は半円形で非常に浅い。規模は径 1.08m、深さ 0.99m を測る。遺物は出土しなかった。

第 52 号土壙 (第 16 図)

第 95 号住居跡の西に位置する。平面形は円形で、断面形は長方形に近い逆台形である。規模は径 1.75m、深さ 0.84m を測り、土層は 3 層に分けられた。遺物は出土しなかった。

第 53 号土壙 (第 16 図)

第 98 号住居跡の北東に位置する。平面形は円形で、断面形は長方形に近い逆台形である。規模は径 1.50m、深さ 0.44m を測り、土層は 2 層に分けられた。遺物は出土しなかった。

第 54 号土壙 (第 17 図)

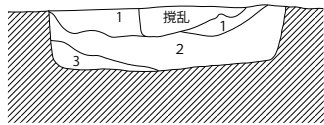
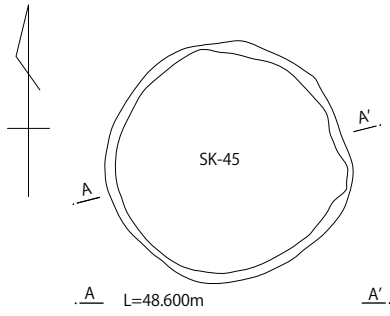
第 95 号住居跡の西に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。規模は長軸長 1.38m、短軸長 1.06 m、深さ 0.50m を測る。遺物は出土しなかった。

第 55 号土壙 (第 17 図)

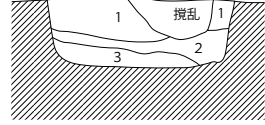
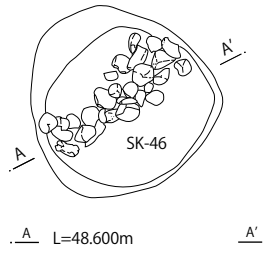
東側調査区の北に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は長軸長 3.68m、短軸長 2.00 m、深さ 2.28m を測り、土層は自然堆積による 9 層に分けられた。遺物として縄文土器の破片が出土している。縄文時代の陥穴と考えられる。

第 56 号土壙 (第 10 図)

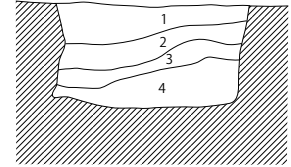
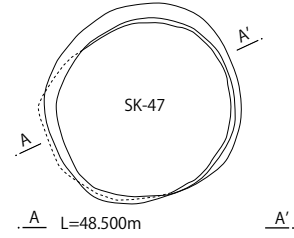
第 96 号住居跡の北西部に重複している。土層の切り合い関係から住居跡が古く、本土壙が新しい。平面形は半円形、断面形は逆台形で、規模は径 1.20m、深さ 0.28m を測る。土層は 3 層に分けられたが、本遺構にまつわる遺物は出土しなかった。



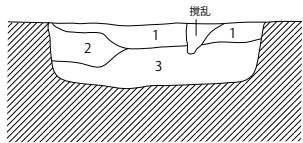
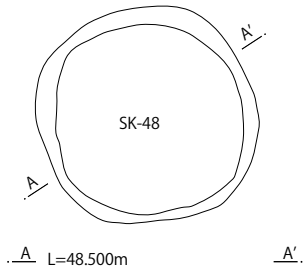
- (SK-45)
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む軟質の層
 - 2 黒褐色土 第1層より濃い黒色を呈する層
 - 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む



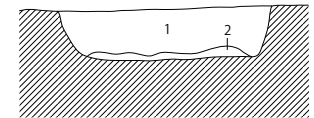
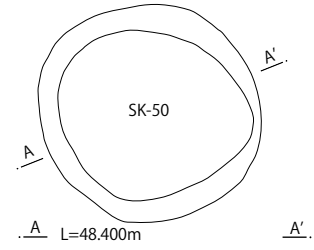
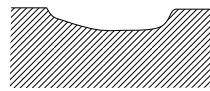
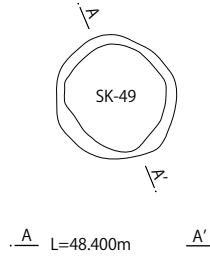
- (SK-46)
- 1 黒色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを多く含む
 - 3 黒色土 礫を多く含む



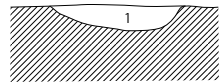
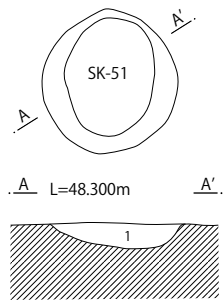
- (SK-47)
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量含む
 - 2 暗黄褐色土 第1層よりローム粒・ロームブロックが多い
 - 3 黒褐色土 黒色土に多量のロームブロックが混入する
 - 4 暗黄褐色土 第3層よりロームブロックを多く含む



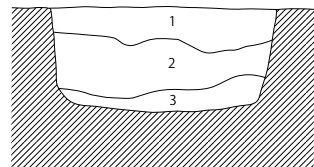
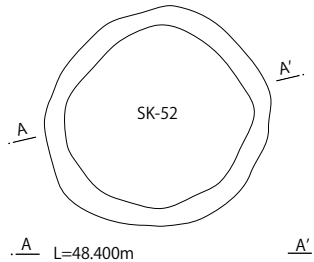
- (SK-48)
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を若干含む
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒を多く含む
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む



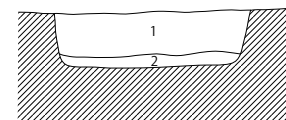
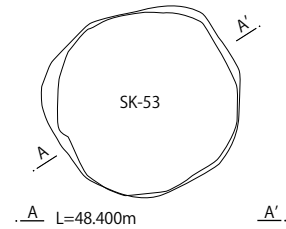
- (SK-50)
- 1 暗黄褐色土 褐色土とロームの混合層
 - 2 暗灰褐色土 灰色がかった層で、粒子が粗い



- (SK-51)
- 1 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む



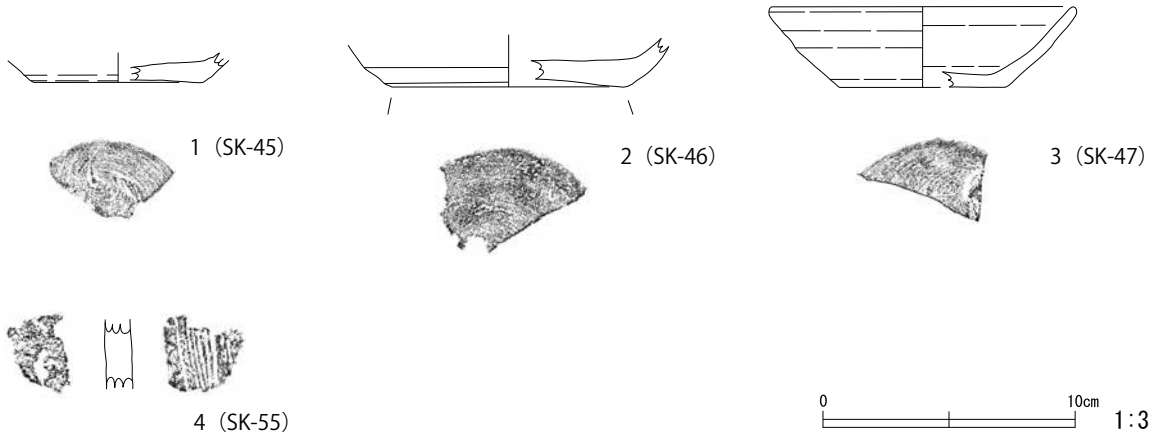
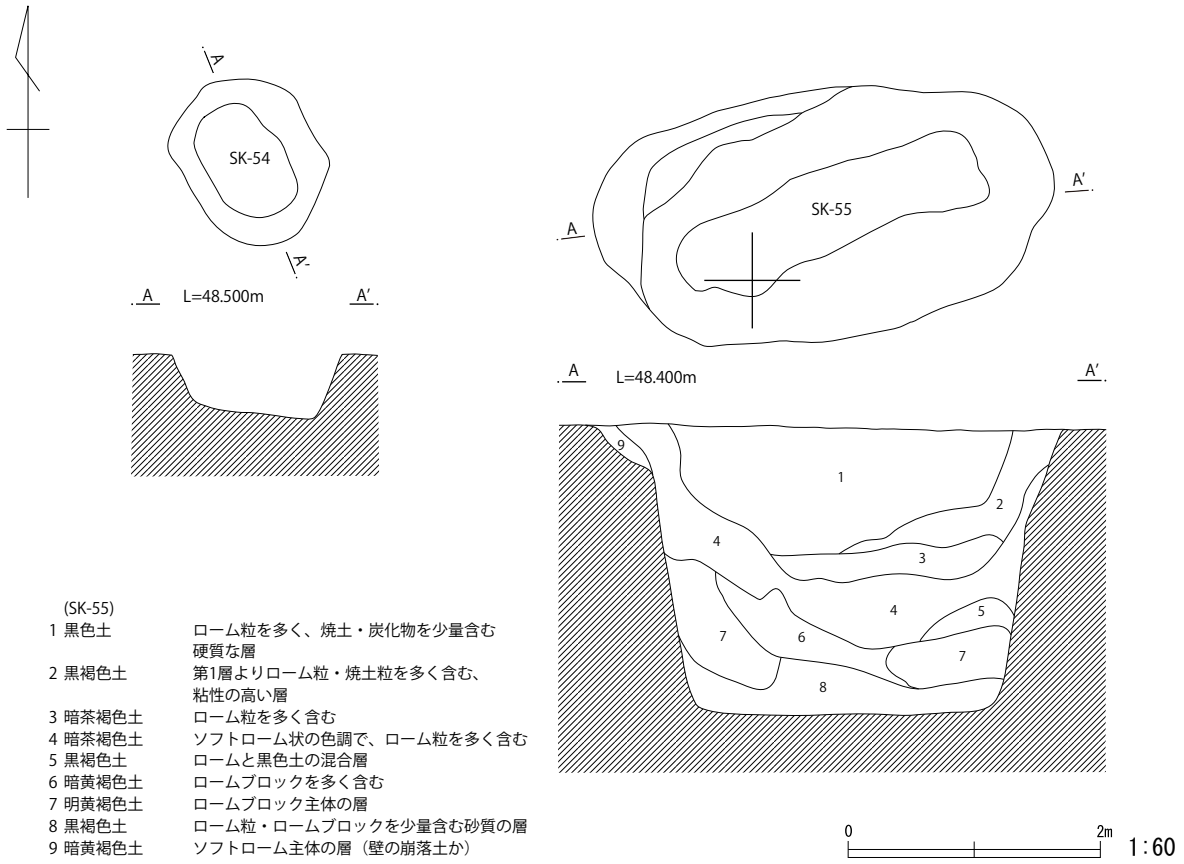
- (SK-52)
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む
 - 2 黒色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む硬質な層
 - 3 茶褐色土 ローム粒を少量含む



- (SK-53)
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む
 - 2 黒色土 ローム粒を少量含む



第16図 土壌 (1)



第 17 図 土 壙 (2) ・ 出 土 遺 物

土 壙 出 土 遺 物 観 察 表

No.	器 種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎 土	焼成	色調	特 徴	産地
1	須恵环	—	(6.4)	(6.8)	—	10%	長石、細砂	不良	明灰色	SK45 出土。底部無調整。	東金子
2	須恵环	—	(9.0)	(9.8)	—	10%	白色粒、小礫	良好	灰色	SK46 出土。底部全面回転へラ削り。	東金子
3	須恵环	(11.8)	(6.4)	(5.2)	3.1	20%	白色粒	良好	灰褐色	SK47 出土。底部無調整。やや硬質。	東金子
4	縄文土器片	—	—	—	—	1%	SK55 出土。				

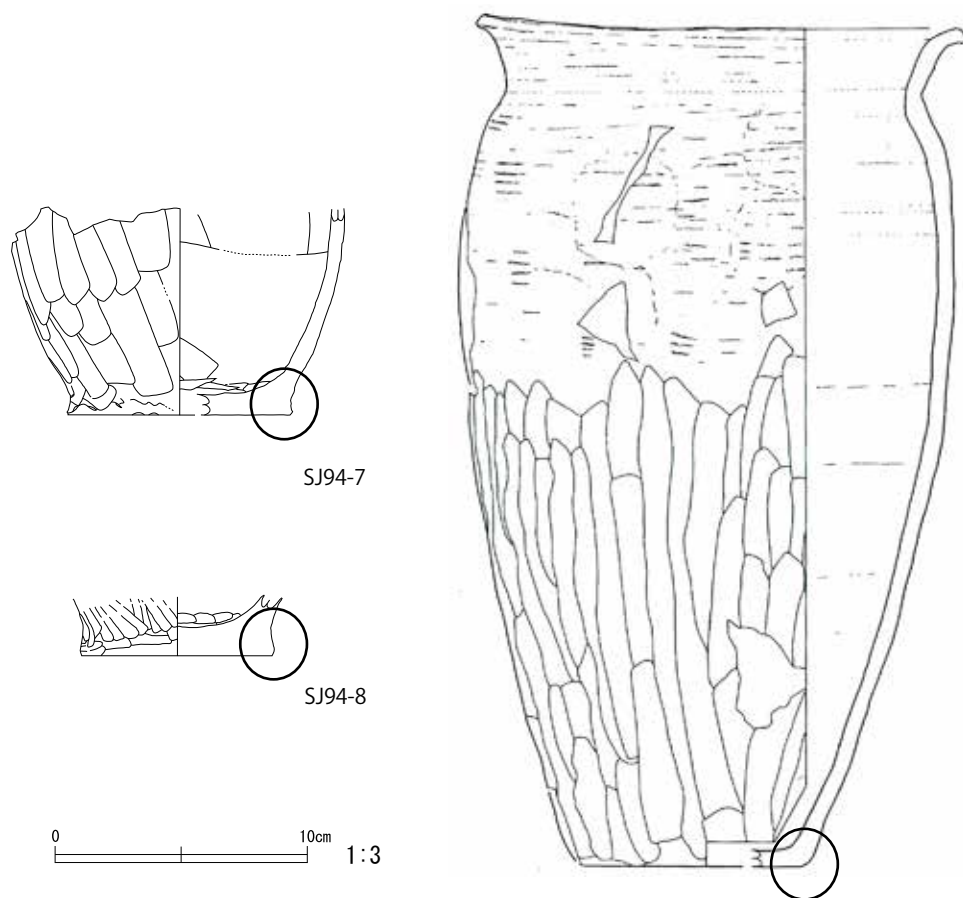
IV 結語

1 遺物

本調査で実測し得た遺物は、須恵小型品 47・大型品 6・瓦 2、土師器小型品 1・大型品 22、石製品 1、鉄製品 1 で、突出して遺物出土量が多い住居は無かった。須恵小型製品の底部の大部分は回転糸切り離した後無調整で、いずれも 9 世紀第 1 四半期以降の製品と推定されるものである。また、共伴する土師甕の口縁部断面は、いわゆる「コ」字状を呈している。

時期的な様相が若干異なるものとして、第 97 号住居跡より出土している南比企産須恵壺が挙げられる。底部の糸切り離し後に回転ヘラ削りが体部下位まで行われた、やや丁寧なつくりをしており、8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期の製品と推定することができる。

大きく形状的な様相が異なるものとして、第 94 号住居跡で出土した土師甕 2 点（前掲第 8 図 7・8）が挙げられる。いずれも厚手に作られた平底のもので、底部外面にはヘラ削りによる粗い調整が確認できる。当地域に一般的な北武蔵型土師甕（底部がやや尖がり、平らな場所にほぼ置けない形のもの）と比べると、出土する機会は圧倒的に少ない形状である。隣接する飯能市の新堀遺跡出土土師甕は、形状とヘラ



揚楯木遺跡 第 94 号住居跡出土土師甕

飯能市 新堀遺跡 H1 号住居跡出土土師器甕

第 18 図 土師甕底部の比較

削り整形の方法に当該土師甕と近い特徴を持つが、第 94 号住居跡出土土師甕は底部を成形台に圧着させるような盛り上がり部が体部から底部の接続部分に確認できるのに対し、新堀遺跡出土土師甕は体部から底部に直線的に接続する点異なるため、制作者の技術系統は異なるものと考えられる。この圧着させるような底部の特徴は相模型甕に近似する（神奈川県の高尾、上浜田、当麻遺跡等から出土している同型甕底部と形状が近似する）が、相模型甕の多くは砂質の粘土を使用している点が当該出土遺物と相違するため、技術的には近似していても産地とはしがたい。

また、第 14 号掘立柱建物出土土師甕も三河か遠江の技術が使用されていると考えられるが、胎土は在地のものに近い事を付言する。

2 遺構

本調査においては、第 1 次調査で検出された第 40 号住居跡以東の住居分布を確認し、本遺跡の遺構分布域が従来の認識より若干東側に拡張された。本調査区は 9 世紀第 2 四半期以降の遺構で構成される一角で、第 97 号住居のみやや古い成立と考えられる。遺物の考察で取り上げた第 94 号住居も、住居形式は当地域に一般的に見られるものである。

第 14・15 号掘立柱建物跡の主軸方位はほぼ同じで平面形も近似しているため、互いの建築物の規格を意識した可能性は積極的には否定し得ない。しかし、柱穴は掘方が不規則な円形ないし楕円形を呈するため、穿孔規格の統一は、作業時にさほど意識していなかったと考えられる。

3 遺跡

本集落形成に付せられた目的を包括する政策事業を明瞭に示す証左は現時点では見出すことができない。過去、灰釉・緑釉土器の出土などから特殊性が指摘されることもあったが、近年の周辺遺跡の発掘調査成果から出土例は増加しており、現在、これら灰釉・緑釉陶器は一般的な集落でも出土する物として認識されている。

本遺跡の特徴はこうした遺物内容よりむしろ遺構配置であろう。本遺跡は現在検出されている奈良・平安時代住居軒数が 89 に上るにも関わらず遺構の重複が比較的少なく、各遺構の相対的な時代推定を当遺跡内で行うことを困難にしている。その一方でこの特徴は、各建物が存続期間を重複させることによって互いの位置を意識しつつ建築された可能性を高めている。このことから、本遺跡が官衙的な要素が薄い一般的な集落ではあるものの、比較的計画的に形成されたものと考えることが可能であり、今後、当時の地方行政の進め方や集落形成過程の分析等に資することができるものとする。

参考文献

(II 章 遺跡の立地と環境)

- 1 今井正美他 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 4 揚榎木遺跡』 狭山市文化財報告 12 狭山市教育委員会委員会
- 2 小淵良樹 1983 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 笹井古墳群・八木北遺跡・滝祇園遺跡』 狭山市文化財報告Ⅷ 狭山市教育委員会委員会

- 3 城近憲市他 1972 『狭山市文化財調査報告Ⅰ 宮地』 狭山市教育委員会
- 4 安井智幸 2005 『森ノ上遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第14集 狭山市遺跡調査会
- 5 渡辺清志 1998 『宿東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財発掘調査調査事業団報告第197集

(Ⅲ章 遺構と遺物)

- 6 大屋道則 1999 『戸張／中原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第237集
- 7 酒井清治 2002 『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 8 中村倉治 2009 『埼玉圏の原始・古代人一人の動きをモノから探る一』 p36～39 埼玉県立川の博物館
- 9 仲山英樹 1988 「古代集落遺跡出土の墨書土器」『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 10 増田正博他 1986 『狭山市史 原始・古代資料編』 狭山市

(Ⅳ章 結語)

- 11 村上達哉他 2002 『笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 新堀遺跡第1～8次調査』 p34・95～97
飯能市遺跡調査会

写 真 图 版

図版 1



揚榼木遺跡 第 11 次調査 西調査区全景 (1)



揚榼木遺跡 第 11 次調査 西調査区全景 (2)



揚櫨木遺跡 第 11 次調査 東調査区全景 (1)



揚櫨木遺跡 第 11 次調査 東調査区全景 (2)



第 40 号住居跡 全景



第 40 号住居跡 遺物出土狀況



第 92 号住居跡 全景



第 92 号住居跡 遺物出土状況



第 92 号住居跡カマド



第 92 号住居跡カマド 遺物出土状況



第 93 号住居跡 全景



第 93 号住居跡北カマド



第 93 号住居跡西カマド



第 93 号住居跡西カマド 遺物出土状況



第94号住居跡 全景



第94号住居跡カマド



第 95 号住居跡 全景



第 95 号住居跡 遺物出土状況



第 95 号住居跡カマド



第 95 号住居跡カマド 袖部分拡大



第96号住居跡・第56号土壇 全景



第96号住居跡カマド



第 97 号住居跡 全景



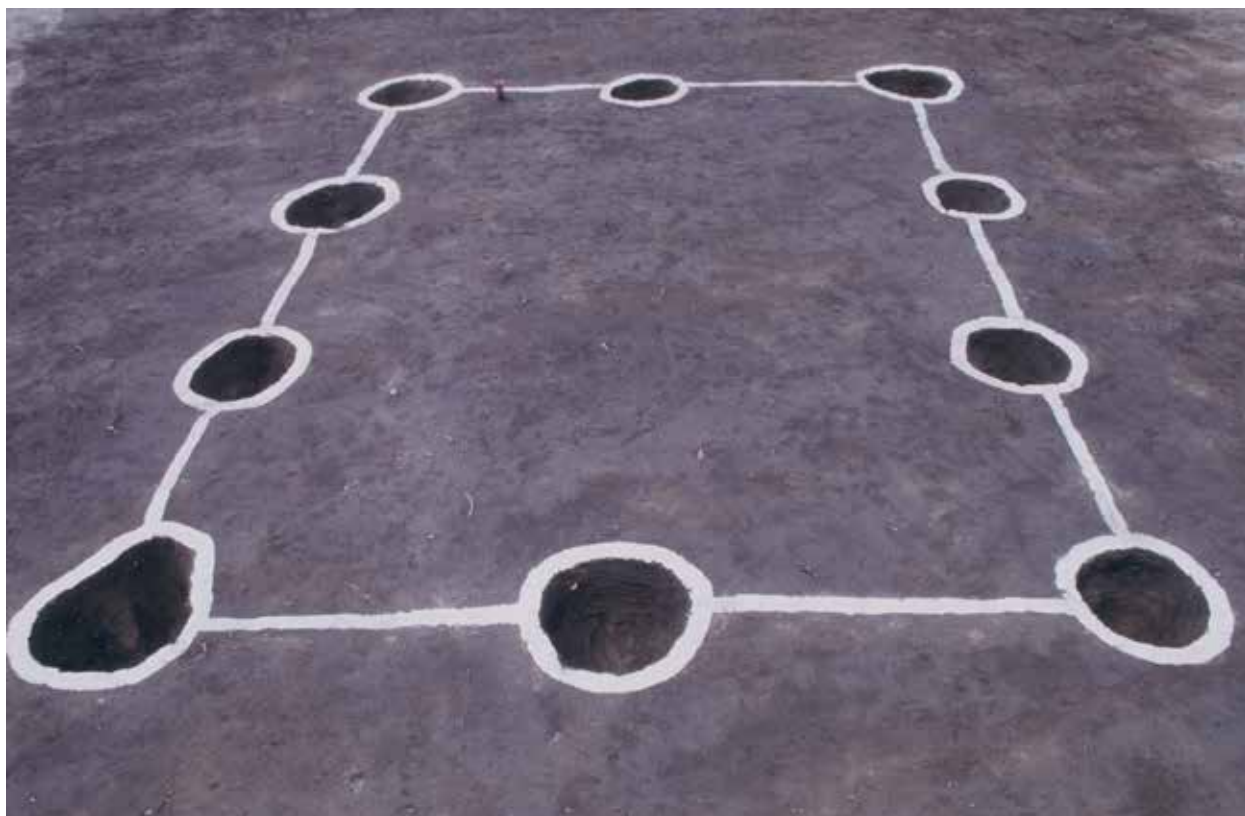
第 97 号住居跡カマド



第 98 号住居跡 全景



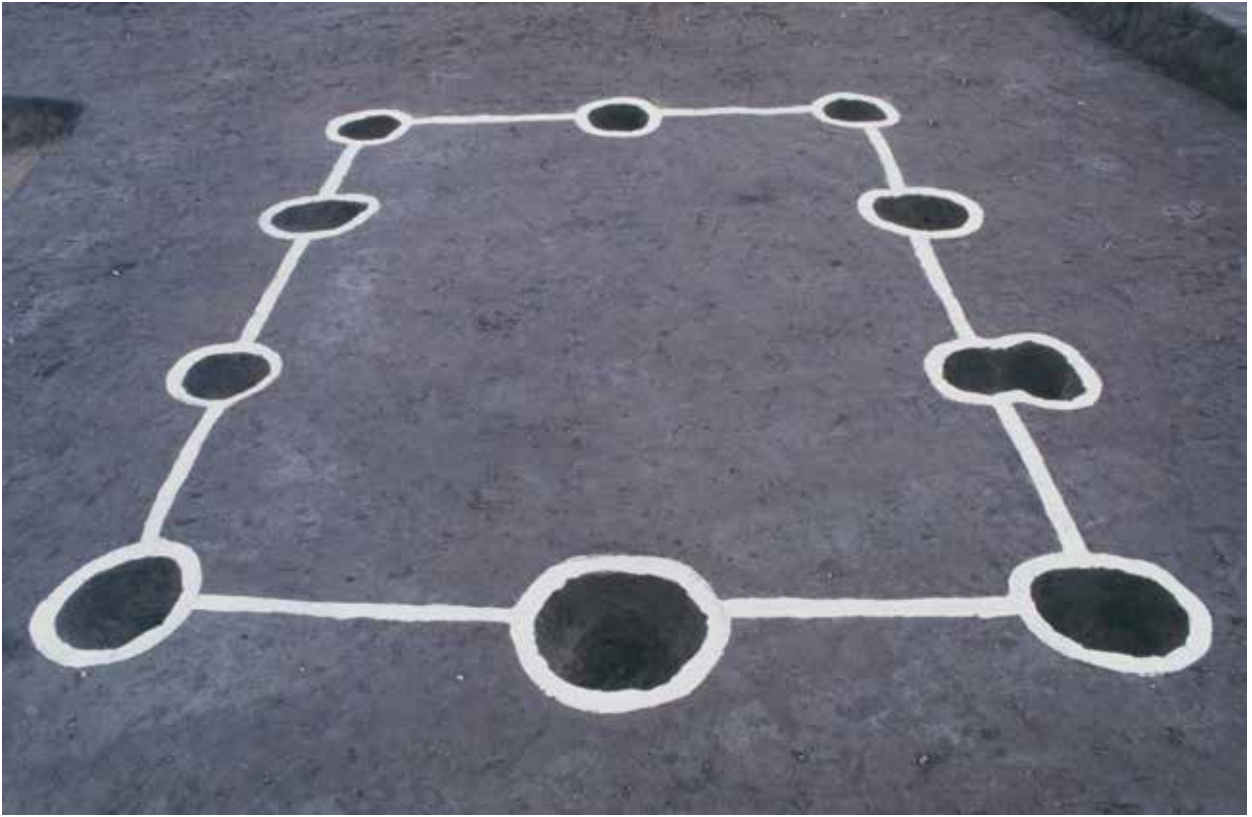
第 98 号住居跡カマド



第 14 号掘立柱建物跡 全景 (1)



第 14 号掘立柱建物跡 全景 (2)



第 15 号掘立柱建物跡 全景 (1)



第 15 号掘立柱建物跡 全景 (2)



第 45 号土坑



第 46 号土坑



第 47 号土坑



第 48 号土坑



第 49 号土坑



第 50 号土坑



第 52 号土坑



第 53 号土坑



第 55 号土壙



揚樞木遺跡 第 11 次調査 調査風景



第 40 号住居跡出土遺物 (1)



第 40 号住居跡出土遺物 (2)



第 40 号住居跡出土遺物 (3)



第 92 号住居跡出土遺物 (1)



第 92 号住居跡出土遺物 (2)



第 92 号住居跡出土遺物 (3)



第 92 号住居跡出土遺物 (4)



第 92 号住居跡出土遺物 (5)



第 92 号住居跡出土遺物 (6)



第 92 号住居跡出土遺物 (7)



第 92 号住居跡出土遺物 (8-1)



第 92 号住居跡出土遺物 (8-2)



第 92 号住居跡出土遺物 (9)



第 92 号住居跡出土遺物 (10)



第 92 号住居跡出土遺物 (11)



第 92 号住居跡出土遺物 (12)



第 92 号住居跡出土遺物 (13)



第 92 号住居跡出土遺物 (14)



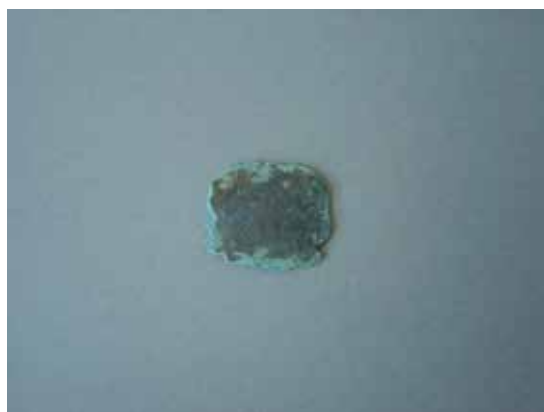
第 92 号住居跡出土遺物 (15-1)



第 92 号住居跡出土遺物 (15-2)



第 92 号住居跡出土遺物 (16-1)



第 92 号住居跡出土遺物 (16-2)



第 93 号住居跡出土遺物 (4)



第 93 号住居跡出土遺物 (6)



第 93 号住居跡出土遺物 (7)



第 93 号住居跡出土遺物 (8)



第 93 号住居跡出土遺物 (10)



第 93 号住居跡出土遺物 (11)



第 93 号住居跡出土遺物 (12)



第 94 号住居跡出土遺物 (2)



第 94 号住居跡出土遺物 (3)



第 94 号住居跡出土遺物 (6)



第 94 号住居跡出土遺物 (7-1)



第 94 号住居跡出土遺物 (7-2)



第 94 号住居跡出土遺物 (8-1)



第 94 号住居跡出土遺物 (8-2)



第 95 号住居跡出土遺物 (1)



第 95 号住居跡出土遺物 (2)



第 95 号住居跡出土遺物 (3-1)



第 95 号住居跡出土遺物 (3-2)



第 95 号住居跡出土遺物 (4)



第 95 号住居跡出土遺物 (5)



第 95 号住居跡出土遺物 (6)



第 96 号住居跡出土遺物 (1)



第 96 号住居跡出土遺物 (4・5)



第 96 号住居跡出土遺物 (8)



第 96 号住居跡出土遺物 (9-1)



第 96 号住居跡出土遺物 (9-2)



第 97 号住居跡出土遺物 (1)



第 97 号住居跡出土遺物 (3)



第 97 号住居跡出土遺物 (4)



第 97 号住居跡出土遺物 (6-1)



第 97 号住居跡出土遺物 (6-2)



第 97 号住居跡出土遺物 (7-1)



第 97 号住居跡出土遺物 (7-2)



第 98 号住居跡出土遺物 (2-1)



第 98 号住居跡出土遺物 (2-2)



第 98 号住居跡出土遺物 (3-1)



第 98 号住居跡出土遺物 (3-2)



第 98 号住居跡出土遺物 (5)



第 98 号住居跡出土遺物 (7)



第 98 号住居跡出土遺物 (8)



第 98 号住居跡出土遺物 (9-1)



第 98 号住居跡出土遺物 (9-2)



第 14 号掘立柱建物跡 出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	うつぎいせきだい 11 じちょうさ							
書名	揚榿木遺跡第 11 次調査							
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会調査報告書							
シリーズ番号	23							
著者氏名	三ツ木康介・安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒 350-1380 埼玉県狭山市入間川 1 丁目 23 番 5 号 電話 04-2953-1111							
発行年月日	西暦 2013 (平成 25) 年 9 月 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
うつぎいせき 揚榿木遺跡	さいたまけんさやましおおあざかみむくとも 埼玉県狭山市大字上奥富 あざしもたかいどう 字下大海道 50-1 外	22	27	139° 25'36"	35° 52'27"	1999.6.23 ~ 1999.9.13	1,540	店舗建設に伴 う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
揚榿木遺跡 第 11 次調査	集落跡	縄文時代	陥穴 1 基	縄文土器 須恵器 土師器	墨書土器「藤」 墨書土器「原」 銅製帯金具
		奈良・平安時代	住居跡 8 軒		
			掘立柱建物跡 2 棟		
		奈良・平安～近世	土壇 12 基		

狭山市遺跡調査会報告書 第23集

揚 櫓 木 遺 跡

— 第11次調査 —

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年10月12日 印刷

平成25年11月12日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会

埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号

電話 04-2953-1111

印刷 有限会社 ミネ五十子印刷

